

# 私的祈祷書類におけるイメージ機能の諸相： 聖トマス・アクィナス図像と祈祷文の問題を中心に

## The Iconography of Saint Thomas Aquinas in Gothic and Early Renaissance Illuminated Manuscripts: Functions of the Image in Prayer Books for Private Devotion

黒岩三恵  
KUROIWA Mie



「我に授け給え」、図像学、写本彩飾、私的祈祷書、トマス・アクィナス  
**Key words:** Concede michi, iconography, manuscript illumination, prayer book, Thomas Aquinas

### Abstract

In late medieval and early Renaissance illuminated prayer books for private devotion, representations of Saint Thomas Aquinas appear in two different types of prayer: suffrages to Saint Thomas Aquinas, and a prayer said to have been written and said daily by Thomas himself, beginning with the words “Concede michi”. The iconography of Saint Thomas is basically different in the two sets of prayers, although a number of image-subjects interchange. The images in the suffrages, predominantly depicting a standing Thomas reading a book, function as traditional *Andachtsbilder*, and can, with important modifications, be traced back to earlier panel painting. By contrast, illustrations for the prayer “Concede michi” stand out for their diversity. Although too simplistic a conclusion should be avoided, and further research is necessary to know their precise function, the author posits that they evoke to the reader/prayer of the prayer book the author of the text, Saint Thomas Aquinas, and his memorable deeds and thoughts, and encourage the book owner to follow his example.

## 1. 緒言

13世紀後半以降、平信徒を主体とする私的信仰の実践の高まりが、時祷書に代表される個人用の祈禱書の流行と発達を促したのは周知のことである。こうした私的な祈禱集、特に時祷書は聖母の小聖務日課、悔恨詩篇、聖人連禱、死者追悼の小聖務日課等を柱としながら、ルロケが前世紀初頭に注目したように祈禱文の数々が自由に加えられていったことが大きな特色をなしている(Leroquais, 1927, t.I, pp.xxix-xxxii)。このことが、時祷書ならびに祈禱文集の体系的な総合研究を困難にする一因となる一方で、当世の教会の教導上の動向という大きな枠組みから、地域的な聖人崇敬等のより限定的な流行の状況を経て、写本を注文し使用した個人の霊的な関心という個別的な枠組みにいたる個々の写本作例の個性を形成していることが、長い伝統を持つ時祷書の美術史的な研究を推進する原動力ともなってきた。また、最近のキリスト教の信仰実践における視覚性の意味、キリスト教美術の機能に関する研究は、従来の図像研究とは距離を置き、観者とイメージとの関係を私的信仰の普及と深化という中世末期の文化的・社会的な状況から解釈しようとする(木俣、2013)。この研究動向は、とりわけ時祷書の彩飾を新たな視点から考察しようとするものである。

本稿では、2009年度以来執筆者が行ってきたトマス・アキナス図像研究の新たな課題として、14世紀後半から16世紀までの時祷書ならびに私的に使用する祈禱文集にみる同聖人図像について考察する。それにあたり、本節では時祷書および祈禱書にみるテキストと彩飾の特性を概観し、それに照らして浮上する聖トマス図像の特殊性ないし問題点をあらかじめ整理しておきたい。

まず、本稿で言う時祷書と祈禱文集の定義を確認しておく。時祷書とは、俗人のための祈禱書であると説明されることが多い(Wieck, 1988, p.27等)。しかし、少数ながら聖職者が注文・所有した作例が存在することは、少なからぬ聖職位が俗人の就く名誉職だという点を考慮に入れてもこのような説明が正確ではないことを示唆する。むしろ、教会により厳密に定められた公的な典例に対して緩やかな規則に基づき、個々の信徒の関心を反映して比較的自由に祈禱文を取り入れた、私的に用いるための祈禱書と定義するのがより適切である(Alexander, et al., 2005, pp.193-195)<sup>1)</sup>。時祷書と祈禱文集は、その私的性格と用途において大きく異なるところはない。祈禱文集では、時祷書の核となる聖母の小聖務日課を筆頭として受難の聖務日課、聖十字架の聖務日課、死者への追悼聖務日課等の、8定時課毎に唱えるべき祈禱文等ならびに教会暦を欠いていることが特徴である。彩飾の観点からみれば、祈禱文集は八つの定時課の分節を視覚的に明示する大型挿絵が規則的に配置されていないために時祷書とレイアウトが異なるようにも見える。ただし、このことは祈禱文集に大型の挿絵が描かれないことを必ずしも意味しない。また、以下でも作例に言及するように、時祷書の巻末近くに掲載されることが多かった各種祈禱文が時祷書全体の内容の拡充に伴って分冊された結果、第1巻がいわゆる時祷書、第2巻以下が祈禱文集となった例も知られている。したがって、時祷書と祈禱文集の間には、彩飾のレイアウトの規則上の相違は、

基本的にはないと考えられる。本稿では、個別の写本の内容に即して時祷書と祈祷文集を区別して用い、双方を総称する場合には私的祈祷書類という語を使用していくこととする。

さて、聖トマス・アクィナス像は、次節以下で詳述するように私的祈祷書類においては、主として二つの祈祷文に付随して描かれる。すなわち、1) 聖トマス・アクィナスへの聖人請願と2) 聖トマス・アクィナスが作詞したと伝えられる“Concede michi, misericors Deus,...”（「我に憐みを授け給え、神よ、…」）と始まる主への祈願文（以下、“Concede michi”と略称）である。

知られているとおり、聖人請願とは個人が特に崇敬する複数の聖人を選択して、各聖人に神へのとりなしのために祈願を行うものであり<sup>2)</sup>、時祷書では定時の聖務日課や悔悛詩篇などに続き写本の後半に配置されることが多い。これに対して、祈願文は、聖母に捧げる二つの代表的な祈祷文“Obsecro te”と“O intemerata”を除くと（Wieck, 1988, pp.94-96）、その多様性にもかかわらずルロケの時代以来あまり研究が進んでいない領域であるが（Wieck, op.cit., pp.103-110）、写本における配置は祈祷文の重要度に呼応する傾向が認められる一方、複数の祈祷文が一括して巻末に配置されることも多い<sup>3)</sup>。

聖トマス・アクィナスの図像系統を鑑みると、後述するように上記の2種のテキスト双方に同種の図像が認められる場合も少なくない。しかし、伝トマス作祈願文“Concede michi”の彩飾で注目されるのは、聖トマス図像とともに複数の異なった主題の図像が、作例により、大型挿絵、彩飾頭文字、欄外余白に描かれることである。こうした種々の図像がテキストとどう関係するのか、写本を使用する祈祷者へどのような態度や認識を持つように促しているのか、換言すればイメージの機能にどのような特徴が認められるのか、一祈祷文を例に一つの問題提起を行うことが本稿の目的となる。

以下では、先行研究を簡単に振り返ったのちテキスト種別に二つの節に区別して聖トマスに関わるイメージについて検討し、私的な祈祷行為とトマス・アクィナスの関係について考察することにする。

## 2. 私的祈祷書類の彩飾：先行研究

時祷書をめぐる先行研究は膨大だが<sup>4)</sup>、個別的なカタログ的・総合的な論考のほかには四つの傾向を指摘しておく必要があろう。第一は、特定の写本を取り上げながらも、彩飾画家とその画業の解明を目的とするものである。様式分析が考察の柱の一つであることは間違いないが、工房集団から単独の画家までを、ミースがトレンドと命名した広い意味で様式を共有する（Meiss, 1968）、時祷書等の定型化した図像系統や特定の図像モデルの採用から特定画家のレパートリーを同定していく作業に見るように（Andrews, 2002）、図像を様式に包含されるものとする前提に立つ傾向が認められる<sup>5)</sup>。第二に、第一の傾向と重複するが、個別作例の分析を通じて複数の彩飾画家の作業の分担の実態を明らかにしようとするものである。この場合、共同制作のあり方と並んで地域別の写本制作の業態、特に工房の構成と相互の協力関係の実態を解明することが目的となる<sup>6)</sup>。

第三に、挿絵・図像入り装飾頭文字の主題・内容の同定を前提としながら彩飾の意味内容と隣接するテキストとの関係を問い、視覚的要素の機能を問うものである<sup>7)</sup>。とりわけ植物文、動物、ドロルリーから構成される欄外余白装飾には、しばしば意味内容の特定が非常に困難なモチーフが少なくない。そのため、主題の特定を第一の目的として隣接するテキストの意味内容、テキスト中の単語の分節を欄外余白モチーフと直接照合する方法がしばしば試みられる<sup>8)</sup>。また、中世最末期からルネサンス期にかけてフランスやネーデルラントを中心とするイリュージョニズムの深化と並行する写実的な動植物文の意味と機能に関する研究は、ペヒトやパノフスキーが行った批判に新たな批判を加えながら、当世の自然観と絵画観の展開とも関わる複数の平面・絵画空間の並置・重層化の評価を行うものである<sup>9)</sup>。

最後に、第四の傾向は、私的祈祷書類の読者とイメージとの関わりを問題にするものである<sup>10)</sup>。彩飾がテキストと関係づけられるのは、読者すなわち私的祈祷書類を繙いて祈祷を行おうとする者の視点においてである。彩飾がどのように祈祷者に作用したのか、反対に祈祷者は彩飾に何を期待したのか<sup>11)</sup>。祈祷書類の機能を考慮したイメージ研究は1990年代以降に盛んになってきた。従来から注目されてきた紋章や所有者の肖像に加え、祈祷文中の人名や所有代名詞、彩飾頭文字や欄外余白装飾等の二次装飾における風俗的な主題やグロテスク等に、祈祷者の理想化された自己像(Orth, 1980; Bennett, 1996)、祈祷者への役割期待を読み取るものが挙げられる(Caviness, 1993; Holladay, 1994)。また、技巧を凝らした欄外装飾の研究も従来から活発であるが、装飾モチーフの分類、新たなモチーフの登場の歴史的背景といった図像学的な主題に加え、記憶術の手段としての機能(Carruthers, 1990)、あるいは巡礼バッジなどの祈祷書外部の宗教行為の要素を追加した例と祈祷行為との関係の考察等(Büttner, 2004; Rudy, 2011)、私的祈祷書類への読者の種々の積極的な関与を問題とする研究が注目される(Reinburg, 2012)。

### 3. 聖人請願と聖トマス・アキナス図像

トマス・アキナスに限らず、聖人請願を掲載する写本の大部分は時祷書である。聖人請願は4種の祈祷文、すなわち交唱、先唱、答唱、祈願により構成される(Wieck, 1988, p.165)。これらのテキストは、大抵の場合は1頁の収まる長さであり、原則として聖人祝日の聖務日課より抜粋されたものである。しかし、トマス・アキナス図像を伴う彩飾写本の作例では、その原典が明確に判明しないものも多い。附録1bに記載するとおり、聖トマス・アキナスへの請願祈祷文は複数存在する。このように、聖トマス・アキナスへの聖人請願を構成するテキストに、使用式が共通する場合があるにも拘らずヴァリエーションがある理由は、現時点においては明確ではない。

聖職者が使用する聖務日課書に聖トマス・アキナス図像が出現するのがトマスの聖務日課の成立とほぼ同時期の1340年以降と考えられるのに対して(Kuroiwa, 2013)、私的祈祷書類への聖トマス・アキナスの請願と図像の登場は、確認のかぎりでは1410年代以降と比較的遅い。

(附録 I-a 参照)。最古の作例が確認される地域から年代順に作例を概観しておく。

確認写本中で最古の作例は、アンジュー公ルネ 1 世が所有したことが知られるパリ使用式の『エジャートン時禱書 (ルネ王の時禱書)』である (附録 I-a, no.9)。同写本は、1442 年から 1443 年頃にバルテルミ・デックにより加筆がされたことが知られているが<sup>12)</sup>、1410 年頃に 4 人の彩飾画家または工房によって制作された部分のうち、エジャートンの画家・工房によって制作された聖人請願の彩飾の中にトマス・アキナス半身像が含まれる (図 1)。2 列のテキスト・コラムから構成されるレイアウトを特徴とする同時禱書の f.88v において、テキスト・コラム幅の挿絵に室内でほぼ正面を向き、頭部をいくらか傾斜させながら左下に視線を落とした聖トマスが描かれている。彼は両手で赤い表紙の書物を抱え、金の装飾文を散らした青色の垂れ幕で下半身を覆い隠して、淡紅色のアーチ開口部に向かっている。

ついで、現在ベルギー王立図書館が所蔵するパリ使用式の時禱書・詩篇集は (附録 I-a, no.8)、1410 年から 1420 年の間にパリで制作されたと考えられ、1467-1469 年、1485-1487 年に編纂されたブルゴーニュ公の財産目録に記載が確認される (Bousmann, Van Hoorebeecke, 2000, p.149)。12 の判型の小さな挿絵が聖母の小聖務日課の他中核的な時課を装飾するが、そのほかの彩飾はシャンピ頭文字、織条装飾頭文字等の二次装飾に限定される (Bousmann, Van Hoorebeecke, 2000, p.150)。19 人の聖人に対する請願にトマス・アキナスが加わっている。この写本の調査と分析は今後の課題である。

15 世紀中葉、1440 年代から 1460 年頃には、パリならびにネーデルラント南部で複数の写本が制作されている。まず、パリで 1450 年頃に制作されたパリ使用式の『グーイの時禱書』は (附録 I-a, no.3)、以前はベッドフォード・トレンドに位置づけられ、最近聖ステファノの画家への帰属が提唱されている画家の様式とともに、デュノワの画家様式の彩飾がなされている (Avril, Reynaud, 1993, p.24)。当写本の f.237v には、礼拝堂のような室内で執筆をする聖トマス・アキナスが描かれている。画面左寄りに書見台型の机に向かってペンを執る四分の三観面の聖人の座像が、画面右には白布を掛けた祭壇がおかれている。

同じくパリで 15 世紀の後半に、アカンサス文で構成される欄外装飾と、ジャン・ブルディシヨンの影響を受けつつ稚拙な様式を有する画家によって、ローマ使用式時禱書が制作されている (附録 I-a, no.7)。写本巻末の 30 人を超す聖人請願の 19 番目にトマス・アキナスへの請願が記載される。トマスは、四分の三観面よりのポーズで、黒い頭巾の上に黄金の冠をつけ、首からは金鎖で光輪のペンダントを下げ、右手に書物を、左手に聖体が浮かんだカリスを持ち、屋外の風景の中で半身像として描かれている。

同時期のネーデルラント地域で制作された写本は、3 冊確認される。まず、ユトレヒトで 1440 年頃に制作された『カテナ・ファン・クレーフェの時禱書』では (附録 I-a, no.1)<sup>13)</sup>、p.287 に金の装飾文様を散らした朱色の地を背に、彩色タイル床に立って書物を読む聖トマス・アキナスが描かれている (図 2)。トマスは、白髪、高齢の容貌を与えられ、ドミニコ会修道服の黒色外套に散らされた金色の星のモチーフは、聖トマス・アキナス伝に記述されているトマスの胸

元で輝いたとされる光輪との関係が推測されるが、典拠は定かではない。ただし、ほぼ同時代のイタリアの板絵でも星をちりばめた外套を羽織ったトマスの姿は複数確認される<sup>14)</sup>。典拠やイタリアとネーデルラントの相互の影響関係については今後の課題としたい。

つぎに、『サヴォワ公ルイ1世の時祷書』は、15世紀中葉ないし後半に、おそらくサヴォワ領で制作されたと推測される(附録I-a, no.5)。2名のフランドル様式に分類される彩飾画家によって彩飾された(Avril, Reynaud, 1993, p.208, no.114)。F.174vには、その画家の1人によって、アーチ型枠の半頁大の挿絵が描かれている(図3)。垂直に三分割された画面の中央に、4人の奏楽天使が並ぶ青緑色の屋上バルコニーと黄金色の破風を持った天蓋の下に立つ聖トマス・アクィナスを描く。トマスは、黒色の頭巾を被り、正しくは胸元で輝くはずの光輪が額の中央で光を放っている。彼の右手には開いた書物が、左手には聖体をのせたパテナで蓋をした聖杯が握られている。挿絵の左右は、各々3コマに分割され、『聖トマス・アクィナス伝』を典拠とするトマスの生涯の6場面が描かれている。左側3コマには、〈ドミニコ会に入会するトマス〉、〈座敷牢に送り込まれた娼婦を追い払うトマス〉、〈2人の天使に貞操帯を装着されるトマス〉という、若年期におけるトマスのドミニコ会入会の決意の堅さとそれに反対する家族との葛藤の逸話が描かれている。挿絵右側に描かれている3場面は、いずれもトマス生前の奇跡の場面で、〈著作を執筆中のトマスに出現するパウロと教皇グレゴリウス〉、〈ナポリのサン・ニコラ礼拝堂で磔刑像に祈祷するトマスの身体の浮揚・磔刑像のトマスへの言葉〉、〈臨終のトマスの魂を受け取りに出現するパウロ〉である。

1454年頃に、オーデナルドを拠点としてブルゴーニュ公にも仕えたジャン・ル＝タヴェルニエがグリザイユで彩飾したのが『フィリップ善良公の時祷書』である(附録I-a, no.2)<sup>15)</sup>。同時祷書には、聖トマス・アクィナスへの請願とともに、次節で見るとようにトマスが作詞したと伝えられる祈願文“Concede michi”も掲載されている。前者は、f.269vに幅、高さともにテキスト欄の半分程度のサイズの挿絵に、礼拝堂を思わせる三方の壁面に格子窓を嵌め込んだ屋内を情景とする。聖トマス・アクィナスは、そこに左四分の三観面で立ち、左手に持った書物から顔を右にそむけている(図4)。

ほぼ同時代にブルターニュの恐らくナントで制作されたのが『ブルターニュ公ピエール2世の時祷書』である(附録I-a, no.4)。同写本には後述するように、トマス・アクィナス作祈願文“Concede michi”も掲載するが、f.149vには、野外の溪谷に立つ十字架に跪拝するトマスに向かって磔刑像が右手を伸ばしその業績を労っている奇跡の場面が描かれている(Leroquis, 1927, I, p.79)。

最後の作例は1500年から1505年頃に、トゥール派を代表するジャン・ブルディションが、アラゴン王朝最後のナポリ王のために彩飾した『フレデリコ3世の時祷書』である(附録I-a, no.6)。当時祷書はドミニコ会使用式であり、聖人請願には主要なドミニコ会の聖人が揃い、見開き左手のヴェルソには、ナポリ宮廷で活動していた彩飾画家ジョヴァンニ・トデスキーノによる洗練を極めたイタリア・ルネサンスの古典様式の枠の内側に、ブルディションによる聖人の立像が全頁大で描かれる(Avril, Reynaud, 1993, pp.296-300, no.163)。トマスは、p.364に、円柱によって

支えられた三つの壁龕が左後方に収斂する、紅白の敷石を交互に配置した聖堂とみられる建築物の内部に立っている（図5）。彼は、両手で支える胸元で広げた大型の書物のページに視線だけを落とし、右四分の三観面で首をわずかに左に傾けて直立した姿勢で描かれている。

以上をまとめると、私的祈祷書類では、1410年代以降にパリで聖トマス・アクィナスの図像が登場するようになる。ベッドフォード・トレンド、エジャートンの画家並びに工房による作例は、世紀中葉にも引き続き制作される。また同じ時期から、南北ネーデルラントの主要な写本彩飾の制作拠点においても請願文の聖トマス図像が描かれるようになってゆく。確認作例が少数のため、請願聖人図像の成立地域、年代と伝播については今後さらに調査する必要がある。

#### 4. 伝トマス・アクィナス作祈願文 “Concede michi”

トマス・アクィナスが作詞したとの伝承がある祈願文の中でも、“Concede michi”は後述のとおりトマスが日常唱えたものとして知られる。約300語の祈願文は、写本では約2頁から6頁にわたって記載される。その全文は、末尾の附録II-bに掲載した。

この祈願文については、ドイルがイギリスで15世紀前半に筆写されたテキストならびに俗語訳の校訂を行ったほか、最近スコット＝ストークスが女王メアリ1世の祈祷書に記載されている祈願として考察している以外は、研究がほとんどなされていない（Doyle, 1949; Scott-Stokes, 2006, pp.139-140）。唯一、その由来を示唆するのは、グリエルモ・ディ・トッコが教皇ウルバヌス6世の命によりトマスの列聖審査に際して1318年から1323年の間に編んだ『聖トマス・アクィナス伝』である。ル・ブラン＝グワンヴィクによる同伝記の校訂版（Le Brun-Gouanvic, 1996）ならびに同伝記の第四・最終執筆段階のテキストに基づくフランス語訳では、伝記前半部分の第29章の末尾に“Concede michi”全文が記載されている。なお、四段階にわたり執筆が進められた『聖トマス・アクィナス伝』の最終段階に祈祷文“Concede michi”が加筆された（Le Brun-Gouanvic, 2005, pp.78-79）。

“Concede michi”とトマス・アクィナスの関わりについて、グリエルモ作『聖トマス・アクィナス伝』に基づいて整理しておく。同伝記は、前半「生涯」編に70章、後半「奇跡」編に146節を収録する、列聖審査書に基づく聖人伝の形式を踏まえている。前半「生涯」編の第29章から34章において、あらゆる徳を備えたトマス・アクィナスの敬虔すなわち、日常の熱心な祈願（第29章）、その結果としての深い学識（第30-32章）、身体の浮揚の奇跡（第33章）、祭壇前の磔刑像との対話の奇跡（第34章）が記述されている。祈願文“Concede michi”は、上記5章から構成される一連のエピソードの冒頭に配置されていることになる。伝記執筆の最終段階に至って加筆が行われた事実は、執筆の第三段階以前は、トマス・アクィナスが日々熱情を込めて神に祈りを捧げていたという行為に記述の重点が置かれていたことを示唆する。第四段階では加えて、その祈願の具体的な文言を示唆する内容へと修整が進められたことを窺わせる。ただし、聖人伝の文中には、折々にトマスが“Concede michi”を唱えていたとは具体的に書かれてはいない。



以上からは、二点が指摘されよう。まず、“Concede michi” が実際にトマス・アクィナス自身が作者だということは確実視できないという点である。上述の第 29 章では、“Concede michi” の記載に先立ち「我らが信心深き博士（トマス）が作詞なされたと伝えられている祈禱文は下に続くとおりである（下線は筆者）」と述べられていることは、グリエルモが伝聞に頼っていることを示唆する。現存写本において“Concede michi” の記載が確認されるのは 14 世紀以降である（Wilmart, 1971（1932））。現存する私的祈禱書類でも、“Concede michi” の掲載が確認される最古例は後述するように『ベリー公の小さき時禱書』である（図 6）。しかし、第二点としてより重要だと考えられるのは“Concede michi” の作者がトマスであることが確実ではないにせよ、中世末以来、グリエルモの聖人伝を筆頭として同祈禱文がトマス・アクィナス作であるとして受容されたことである。

目下確認しえた写本数は 28 点である（附録 II-a）。特徴的なのは、写本ごとに表記が異なるが、その大部分が赤色標題において祈禱文がトマス・アクィナス作であることを明記している点である。グリエルモ・ディ・トッコの『聖トマス・アクィナス伝』がどの程度俗人の間にまで知られていたのかを知る直接の手がかりは乏しいが、赤色標題からは聖人伝の第 29 章と第 34 章を典拠とする聖トマス・アクィナス伝の逸話が知られていたことが窺える。

以下に、“Concede michi” を掲載する写本における彩飾について、前節に倣って最古の作例から可能な限り地域別に概観する。

確認された“Concede michi” を掲載する私的祈禱書類は、附録 II-a に掲載した。上述のとおり現存する最古の作例は、『ベリー公の小さき時禱書』である（附録 II-a, no.6）。ベリー公ジャンが複数所有した豪華彩飾時禱書の例に漏れず、同時禱書は、通例は時禱書には含まれない多くの祈禱文を掲載する比較的複雑な内容を有することによって知られる（Avril, 1989）。これは、長兄シャルル 5 世が『ブランシュ・ド・サヴォワの時禱書』に加えた後補に影響されたものであることが指摘されている（Van Buren, 1994-96, pp.262-263）。『ブランシュ・ド・サヴォワの時禱書』の大部分が 1904 年に焼失したために、“Concede michi” もまたシャルル 5 世に倣ってベリー公によって時禱書に加えられたのかは判然としない。しかし、後述するように 14 世紀末から 15 世紀中葉にかけて三分割された『ベリー公のいともしき聖母時禱書』においても“Concede michi” が大型の挿絵を持つレイアウトで掲載されていることは、ベリー公にとってこの祈禱文が重要な意味を持っていたことを示唆する。同時に、『ブランシュ・ド・サヴォワの時禱書』と併せて、ベリー公が注文した時禱書が、ブルゴーニュ公ばかりではなく複数の豪華写本の注文者に影響を与えた可能性については、今後十分に考察を加える必要がある<sup>16)</sup>。

『ベリー公の小さき時禱書』に戻れば、“Concede michi” は、f.117v から掲載される（図 6）。祈禱文に先立ち、テキスト欄の半分の幅の縦長の小さな挿絵には、祭壇前におかれたクッションに時禱書を広げ、祭壇の上方、挿絵右上に上半身を頭わにする神に向かって手を合わせるベリー公ジャンが側面観で描かれている。彼の背後には光背を戴いた聖トマス・アクィナスが、右手を公の背中に添え、上方の神と視線を交わしている。



1378年から1383年の間に対立教皇クレメンス7世のためにジャン・ド・トゥルーズの彩飾によりアヴィニョンで制作されたのが『クレメンス7世の祈祷文集』である(附録II-a, no.1)<sup>17)</sup>。“Concede michi”は、f.6vより図像入り装飾頭文字Cに続いて記載される(図7)。装飾頭文字Cには、小型の卓上に祈祷文集を広げ、跪いて画面右上方の神と対話をするかのように祈る聖トマス・アクィナスが描かれる。これに先立ち、f.6では、テキスト欄の下部に半頁大の挿絵が描かれる(図8)。同図には、木造の天蓋を持つアーチ型開口部のある書斎の中で、机を前にして四分の三観面で座って執筆をする聖トマス・アクィナスが描かれている。書斎の外、天蓋の上には聖霊の白鳩が翼を広げる。また、書斎の右側には、白色の修道衣を着た助手が緑の表紙の大型書物を持ってトマスの方を向いている。

図像を含む作例の検討を続ける前に、図像を含まない作例をまとめておく。1370年代のパリで『フィリップ豪胆公の祈祷文集』が制作された(附録II-a, no.25)。加えて14世紀フランスでは、金彩装飾頭文字と棒状装飾によって彩飾された女性信徒のためのフランス語とラテン語の祈祷文集2冊の中に、“Concede michi”が含まれている(附録II-a, nos.17,18)。

続いて15世紀に制作された図像を含まない作例を挙げる。ボルティモアに所蔵される『時祷書』は、15世紀初頭にフランドルないしアルトワで制作されたと推定される(附録II-a, no.26)。フランス国立図書館所蔵の『オルレアン公シャルルの祈祷文集』は、アザンクールの戦後、同公が捕囚先のイギリスで注文した写本である(附録II-a, no.19)。ケンタッキー州立大学図書館所蔵の『フィリップ＝マリア・ヴィスコンティの時祷書』は、イタリア北部で15世紀初頭に制作された(附録II-a, no.11)(図9)<sup>18)</sup>。1430年から1450年頃にはネーデルラントで『マルグリット・ド・クルーイの祈祷文集』が制作された(附録II-a, no.14)<sup>19)</sup>。『ローマ使用式(フランチェスコ会)時祷書』は、15世紀前半にグッピオで制作されたと推定される。続いて、『リモージュ使用式時祷書』は、1449年に制作された(附録II-a, no.21)<sup>20)</sup>。ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館所蔵の『サルティング(マルミヨン)時祷書』は、シモン・マルミヨンの他に、ヴィレム・フレラン、フィッツウィリアム268番写本の画家、ドレスデン祈祷書の画家らが彩飾したことで名高い(附録II-a, no.28)<sup>21)</sup>。当写本では“Concede michi”の彩飾に図像は伴わないと考えられる(Watson, 2011, t.I, pp.400-411, cat.no.72)。最後にシカゴ大学附属ニューベリー図書館が所蔵する『アンヌ・ド・ブルターニュの祈祷文集』は、1499年頃にフィレンツェで制作された(附録II-a, no.16)<sup>22)</sup>。

ここまで挙げた作例の特徴は、注文主が明らかなフランス、ネーデルラント、イタリア北部の貴頭が所有した写本が際立つということである。その他に、ドミニコ会(附録II-a, nos.22, 23)やそのほかの修道院や大学と関連すると考えられる写本が数えられる(附録II-a, nos.15, 18, 24)。

あらためて図像を伴う作例に戻ろう。15世紀に入って制作された写本は、8点である。制作地は、ネーデルラントが3点、イタリア、スペインが2点ずつ、フランス西部が1点である。以下に地域別に列挙する。

まずネーデルラントの作例から見ていく。通称『トリノ時祷書』は、14世紀第3四半期にベリ

一公ジャンが注文した『いとも美しき聖母時禱書』を15世紀初頭に分割譲渡した部分のうち、同世紀中葉にホラント伯ヤン6世の手に渡って彩飾された部分を指すことは非常によく知られている (Marrow, 1996)。1904年にトリノ国立・大学附属図書館の火災の際に焼失したこの写本については、1902年に撮影された挿絵部分のみの白黒写真から、主としてフーベルト、ヤンのファン＝エイク兄弟ならびに工房の関与の問題を中心として研究が進められてきた (Châtelet, 1993 ならびに Van Buren, 1994-96 に研究史)。同写本の f.72 には、ページ上部三分の二サイズの挿絵とバ・ド・パージュを備えた、ベリー公の時代に構成されたレイアウトを踏襲して “Concede michi” が記載されている (図 10)。白黒の複製図版には赤色標題の記載は認められない。大型の挿絵を備えたレイアウトは祈願文では珍しいが、『トリノ時禱書』の原型である分割前の『いとも美しき聖母時禱書』が、『ベリー公の小さき時禱書』(附録 II-a, no.6) の構成を踏襲していることが知られているとおり (Van Buren, 1994-96, pp.262-263, 267)、14 世紀後半の段階においてこの祈禱文の彩飾をさらに発展させる意図はあったものと推定される。しかし、大型挿絵はファン・エイク様式の通称ジャン・シュヴローの画家によって、ヤン・ファン＝エイク作《書斎の聖ヒエロニムス》の構図を借用して描かれていることが指摘されている (Châtelet, 1993, Van Buren, 1994-96, p.333)。その下の図像入り彩飾頭文字 C ならびにバ・ド・パージュの彩飾は通称福者の画家 (Master of the Blessed) に手が同定されている。バ・ド・パージュに詳細な情景を描き込むのは『トリノ時禱書』に特徴的であり、図像の主題までも当初の構想に遡らせることは困難と思われる。以上のような図像プログラム上の問題点を踏まえたうえで、時禱書におけるトマス図像を記述する。まず、大型挿絵には、高い背のある椅子に腰かけ、布を掛けた机の上に書見台を置いて自らペンを走らせている聖トマス・アクィナスが描かれている (図 10)。画面奥の壁にはカーテンで仕切られた 2 段からなる整理棚が作りつけられている。上段に水平に積まれた数冊の書籍、下段には液体が入ったガラス製のフラスコやアストロラーベと思われる円形の器具等が収められている。下段からは、磔刑像が前傾気味に飛び出し、キリストの口元から展開された巻物がトマスに向かって翻っている。構図や室内は上述のとおりヤン・ファン＝エイク作《書斎の聖ヒエロニムス》を踏襲するとみて間違いはないと思われるが、執筆中のトマスに磔刑のキリストが言葉を掛ける情景は、特異である。この挿絵の図像の典拠を、第 2 節で取り上げたグリエルモ・ディ・トッコ作『聖トマス・アクィナス伝』第 29 章から第 34 章、特に聖人の執筆活動について記述する第 30 章から第 32 章および礼拝堂内での祈禱中に祭壇上の磔刑像に語りかけられた奇跡に見ることは容易い。

この挿絵の下に位置する図像入り彩飾頭文字 C を見ると、頭文字の湾曲した内部に、左を向き、聖体を載せた聖杯を手に市松文の床の上に立つ聖トマス・アクィナスの立像が描かれている。バ・ド・パージュには、トマスの臨終の情景が描かれている。画面左端の寝台に横たわるトマスの傍らにはドミニコ会会員、フランチェスコ会修道士とともに着飾った女性が手を合わせて座る。画面右端の部屋の出入り口には聖ペテロに続いて聖パウロが立つ。彩飾頭文字 C の立像は、グリエルモのものを含め、聖人伝等のテキストを典拠とするというよりは、上記第 2 節で扱った聖人請

願の図像の系譜からの借用と考えられる<sup>23)</sup>。バ・ド・パージュの典拠については、未確認の原典に依拠する可能性が指摘されている (Van Buren, 1994-96, p.363)。この点に関しては、複数の文献の精査が必要だが、グリエルモの聖人伝に言及がないフランチェスコ会修道士の参列がベルナルドゥス・グイドニス著『聖トマス・アクィナス伝』には認められることが示すように (Prümmer, 1931)、バ・ド・パージュの情景は複数の典拠を混合した結果とも考えられる。

大型挿絵が、グリエルモの聖人伝の中で祈願文 “Concede michi” が記載された第 29 章に続く第 30 章から第 34 章に基づくことは、“Concede michi” を聖トマス・アクィナスの事績に結び付ける意図があると考えられる。他方、既述のごとく図像入り彩飾頭文字 C のトマス図像は、15 世紀にネーデルラントで制作された私的祈祷書類に多く採用された図像を踏襲している点で規範に従うものである。しかし、次節で考察するように、聖体を掲げる聖トマス図像の普及の背景と意図を探ることがこの作例でも重要だと考えられる。

次の作例は、1436 年から 1443 年頃にバレンシアを代表する彩飾画家レオナルド・クレスピにより彩飾された『アラゴン王アルフォンソ 5 世の時祷書』である (附録 II-a, no.9)<sup>24)</sup>。同時祷書の f.36 に “Concede michi” が、半頁大の大型挿絵、青色、赤紫、ターコイズ・グリーン、金泥を基調とする先端が尖ったアカンサス葉文で装飾された彩飾頭文字 C とそこからバ・ド・パージュへ水平に伸びるアカンサス葉文によって装飾されている (図 11)。大型挿絵には、グリエルモ作聖トマス伝第 34 章に依拠し、礼拝堂で祈祷を唱えている間に身体が宙に浮揚するトマスと、彼に向かって「我のこを巧みに書いてくれた」と磔刑像が語りかけた奇跡を示唆する、キリストからトマスの方へ向けて緩やかな S 字を描く巻物が、四つのアーチで区切られた二つの祭室に分かれた聖堂内部に描かれている。大型挿絵に続き、赤色標題が、祈祷文がトマス・アクィナス作であることを明記する。バ・ド・パージュのアカンサス葉文の中には、ミミズクを槍で狙いをつける、盾を持つ裸の野人が描かれている。

前節で言及した、15 世紀後半に入って間もない時期に制作されたと推定される『ブルターニュ公ピエール 2 世の時祷書』の f.26 は (図 12)、ブルターニュ公の紋章を多数配した欄外余白について先行研究があるが (Avril, Reynaud, 1993, p.175)、半円アーチ枠の大型挿絵と金彩装飾頭文字 C に囲まれた 3 行のテキストが、“Concede michi” の冒頭にあたることにはこれまで全く注目されて来なかった。大型挿絵には、聖堂内の祭室の入口と思しき場所に設置された緑色の天蓋の下に跪くブルターニュ公ピエール 2 世が祭室奥、上方に出現する神に向かって祈る様子が描かれている。垂れ幕が左右に下がる天蓋の位置、側面から捉えられた跪拝するピエール 2 世の姿勢、彼の前に置かれた祈祷書が載る黄褐色の布に覆われた小机、祭室奥上方に上半身を顕わす神などの配置は、15 世紀前半にはパリの写本彩飾において定型化された構図に従っている。特に『ベリー公の小さき時祷書』(ff.106v, 119, 119v, 121v) において、ミサの場面と構図をほぼ同一とする聖堂内で神に向かって祈るベリー公の姿が (Purtle, 1990-91)、パリの主要な彩飾写本画家・工房の図像モデルとなってブルターニュに到来した可能性が推測される。

15 世紀後半のフランスで制作された写本がプラハ国立図書館に所蔵されている (図 13)。ジャ

ン・ロラン2世の画家の様式で描かれた、4行高のほぼ方形の挿絵は、レイアウトから判断すると図像入り彩飾頭文字Cが描かれる予定だったと考えられる（右上隅に三日月のように見える頭文字Cが書きこまれている）。教皇の三重冠を被った父なる神が、左手に十字架のついた宝珠を持ち、祝福をする半身像が蒼穹を背にして立っている。

ネーデルラントで制作された図像を伴う作例は3点である。まず、前節でも取り扱った『フィリップ善良公の時祷書』のf.18には、フランス語の赤色標題を伴って、7行の高さとテキスト・コラムの半分よりわずかに大きな幅の矩形の挿絵が描かれている（図14）。その主題は、明らかに《キリストの洗礼》である。“Concede michi”に先行するのは、父への祈願、子への祈願、聖霊への祈願、三位一体への祈願であり、続くのは聖バルバラへの祈願で、いずれも規範的な図像が描かれている。したがって、一連の祈祷文の流れからは、“Concede michi”の挿絵として《キリストの洗礼》が選択された理由は明らかではない。

次に、1480年代後半に位置づけられるハーヴァード大学附属図書館が所蔵する『エマーソン・ホワイト時祷書』では、図像入り彩飾頭文字Cの中に、低い地平線の草地に置かれた椅子に座して膝の上に書物を開いて置き、右手にその上に聖体が浮揚している聖杯を持つ聖トマス・アキナスが描かれている（図15）。やや粗野な容貌、青空を水平の筆致で彩色する技法、くすんだ色彩はドレスデンの時祷書の画家の様式との近似性を感じさせる。ページ余白部分の金泥によるキク葉の植物文を始めとする植物は、いわゆるгент・アソシエーツと称される彩飾画家群への帰属を示唆するが（Kren, McKendrick, 2003, pp.169-173, no.32）、聖トマス・アキナス像を描いた画家に一致する他の作例は確認に至っていない<sup>25)</sup>。

3点目の作品は、15世紀末から16世紀初頭にгентまたはブリュージュで制作された『フアナ1世の時祷書』である（附録II-a, no.27）<sup>26)</sup>。当写本では、“Concede michi”が記載される冒頭のページ（f.156）のみ欄外余白に黄褐色の地に苺、三色堇、矢車草、虻、金盞花、蛾などが散らされ、続くページには喉を除く三方の欄外余白に1点ずつ草花または鳥類のモチーフを置く装飾プログラムを採用している（図16,17）。一見、装飾のみで構成される彩飾のように見えるが、動植物モチーフの象徴的な意味をひとまず措くとして注目されるのは2ページ目にあたるf.156vの下部欄外余白に描かれた、三方を糸で縫いとめられた巡礼バッジである（図17）。

最後に、イタリアで制作された写本を取り上げる。2点の写本が確認された。まず、『チェチリア・ゴンツァーガの時祷書』は、恐らくミラノで1470年頃に制作されたと考えられる（附録II-a, no.2）<sup>27)</sup>。Fol.129に、星を散らした背地に書物を携えた聖トマス・アキナスの側面観の胸像が、図像入り彩飾頭文字Cに描かれている（図18）。ついで『ウォリック公ヘンリ・オヴ・ボーションの詩篇・時祷書』は、イギリスで15世紀中葉に制作された後、1482年頃フェラーラで“Concede michi”を含む数葉が補われた（附録II-a, no.3）<sup>28)</sup>。半頁大の大型挿絵には、黄色がかった淡紅色の塀を背にして2本の円柱が支える淡紅色のエンタブラチュアの下に立つ白髪の聖トマス・アキナスが描かれている（図19）。彼は左手に書物を持ち、右手の上に聖堂の雛型を載せている。聖人の背後、塀の切れ目から画面奥へ向かって針葉樹が1本ずつその中腹に立つ丘の

ある風景が青空の下に広がっている。

このように、“Concede michi”の彩飾は、14世紀はフランスの作例が比較的多く、15世紀にはネーデルラントの作例が加わり、少数ながらイタリア北部の作例がほぼ同時代から認められる、という特徴をひとまず指摘することができる。この祈願文の彩飾で際立つのは、主題が比較的多彩であることである。トマス・アクィナス像を中心に図像類型の整理を行ったうえで、“Concede michi”彩飾の多彩さの背景については次節で扱うことにする。

## 5. 祈りの実践とイメージの機能

第3節ならびに第4節では、祈禱文別に聖トマス・アクィナス図像あるいはその他の図像を概観した。この節では、テキストすなわち祈禱文とイメージの関わり、特に後者の祈禱行為において占める機能性について考察することにしたい。

請願文または祈願文“Concede michi”の2種の祈禱文テキストとイメージの関係を考察する際、後者の機能が問題となる。

まず、聖トマス・アクィナスの立像を描く写本を挙げると、『サヴォワ公ルイ1世の時禱書』(図3)、『アラゴン王フレデリコ3世の時禱書』(図5)、『カテリナ・ファン・クレーフェの時禱書』(図2)、『ウォリック公ヘンリ・オヴ・ポーシャンの時禱書(フェラーラ後補)』(図19)、『フィリップ善良公の時禱書』(図4)、『トリノ時禱書』(図11)の6点である。注目すべきことは、この6点中『トリノ時禱書』、『ウォリック公ヘンリ・オヴ・ポーシャンの時禱書(フェラーラ後補)』を除く4点が、聖人請願の挿絵であることである。図像類型に注目すると、『カテリナ・ファン・クレーフェの時禱書』、『フィリップ善良公の時禱書』、『アラゴン王フレデリコ3世の時禱書』の3作品は、彩色タイルの床の上に四分の三観面で立つ聖人が、胸元に開いた書物を抱えている姿勢が共通する。

四分の三観面で持物を伴う立像は、写本彩飾に限らず板絵、壁画、彫刻を含む聖人像のもっとも典型的な形式である。最古の聖トマス・アクィナスの立像は、ベルナルド・ダッディによる三連画左翼である<sup>29)</sup>。以後、立像が確認できるのは約1世紀後のフラ・アンジェリコまで間が空くが、その間トマスの半身像<sup>30)</sup>、座像が確認される<sup>31)</sup>。これらイタリア絵画に共通するのは、トマスが持つ書物が観者に向けて垂直に立てて見開き両ページの字面を提示していることで、イタリアの写本彩飾でもトマスの著書や祝日の聖務日課を彩飾する頭文字でよく認められる(Kuroiwa, 2012, 2013)。したがって、フランスならびにネーデルラントの私的祈禱書類の彩飾におけるトマスの立像類型は、イタリアとは別個の図像伝統に基づくと推定することが可能である。

胸元で開いた書物に目を落とす、北方的な聖トマス・アクィナス立像の早期の作例が存在した可能性を認識する一方で、現存作例からは、上述の3作品が登場する15世紀中葉に北方の図像類型が成立した可能性も考慮する必要があるだろう。挿絵の比較をすると、修道服の全般的な衣文、上衣の裾をたくし上げて肘で抑える仕様に類似が認められ、聖人の姿勢、書物を抱える高さ

など大まかなシルエットは全作品に共通するようと思われる。他方、細部、たとえば上着の裾が描く複雑な曲線、書物を持つ手つき、頭部の傾け方、顔の向きは各々異なる。イタリア製の板絵も加えて総合的に推測すると、14世紀に成立した立像を祖形として15世紀中葉に書物を読む形が派生したとも考えられる。現存作例では『カタリナ・ファン・クレーフェの時祷書』が最古作例だが、これに遡って作例が存在したのか、より重要なこととしてネーデルラントならびにフランスで読書するトマス立像が成立した背景は何であるのか、について資料は確認できていない。ただ示唆的なのは、トマスが手にする書物がイタリア美術のそれに比較してより小型化していることで、これらの図像が私的祈禱書類に描かれていることを考慮して、トマスが祈禱書を読んでいることを表現するための変更と解釈することはあながち的外れではないと考えられる。いずれにせよ、聖人請願の聖人図像は、私的祈禱書類に掲載される複数の聖人図像と統一された形式を持っていたこと、板絵と共通する機能を有することから、立像が最も多く描かれたと解される。

次に考察したいのは、図像類型としては私的祈禱書類では最も多く描かれるものの一つである跪拝像である。しかし、聖トマス・アクィナスとの関わりにおいて検討すると、概観したとおり、複数の跪拝者が認められるという際立った特徴が認められる。作例を改めて列挙すると、『ベリー公の小さき時祷書』(図6)、『ブルターニュ公ピエール2世の時祷書』(図12)、『アラゴン王アルフォンソ5世の時祷書』(図11)、『対抗教皇クレメンス7世の祈禱文集』(図7)である。これらが彩飾するのは、すべて伝トマス・アクィナス作詞の祈願文“Concede michi”である。

現存作例では『ベリー公の小さき時祷書』が最も古く、1380年代のパリにおいて、偽ジャクマールによって制作された。この画家は、1410年代までパリを写本彩飾の中心地たらしめたフランコ・フラマン様式の画家たちの第一世代の彩飾画家たちに続く、多作な画家の1人である。彼が描いた挿絵は(図6)、時祷書の使用者と祈禱文との関係を最も具体的に図式化したものだといえる。同写本のファクシミリ版の解説でアヴリルはこの挿絵について、聖トマス・アクィナスが神にベリー公をとりなしていると記述している(Avril, 1989, p.288)。祈禱するベリー公と神の間をトマスが仲介しているのは違いないが、ベリー公がトマスに対して祈禱を捧げているわけではないので、この挿絵でトマスがとりなしをしていると解釈するのは不正確である。赤色標題では祈願文の作者がトマスであると明記されている(附録II-a, no.6)。また、この時祷書のf.8からf.9vにかけて、ドミニコ会修道士(おそらくベリー公の聴罪司祭)がベリー公を教導する2点の挿絵を伴って神に従って生きることの重要性を説いた俗語テキストが掲載されていることから窺えるように、『ベリー公の小さき時祷書』における祈禱文の選択と構成には、ベリー公の意向と共に彼の聴罪司祭の判断が関与していると考えられる。以上が示すのは、“Concede michi”が、トマス・アクィナスが日常的に唱えていた祈禱文だったことがベリー公には周知の事柄だったであろうということである。こうした点から、挿絵はトマスがベリー公に対して“Concede michi”をどのように唱えるべきなのかを身をもって教えている場面を描いている、換言すれば、ベリー公に対して自らを模倣するよう促していると解釈できるのではないだろうか。

『クレメンス7世の祈禱文集』(図7)と、1440年代制作の『アルフォンソ5世の時祷書』(図



11) は、グリエルモ・ディ・トッコ『聖トマス・アキナス伝』第29章-第34章を典拠とし、聖人伝中のエピソードを再現している。この2写本における彩飾は、祈願文の作者像であると同時に祈願文を唱えた祈祷者像を表している。挿絵中の祈祷者は、聖人伝テキストと同時に祈願文の最初の誦者であるトマス・アキナスを想起させ、同時に自分が祈願文を唱えるにあたり模範とすべき者をも提示することになる。『チェチリア・ゴンツァーガの時祷書』の頭文字Cの中に描かれた側面観の胸像も、観者・祈祷者に対して同様の連想を促すものと考えられる(図18)。他方、本来は頭文字が書かれるべきスペースに描かれた父なる神は(図13)、祈願文の内容から着想を得たと推定するのが妥当だろう。観者・祈祷者が祈願すべき対象が描かれている点で、慣例的な図像選択にすぎない。

以上の例に対して、重層的な解釈を行うべきか慎重な判断が必要とされるのは『ブルターニュ公ピエール2世の時祷書』の挿絵である(図12)。この挿絵が、神へ“Concede michi”を介して相対する祈祷者ピエール2世の姿を単に慣例的に描いたものであるという捉え方も正統である。しかし、本図の構図はベリー公ジャンの複数の時祷書にも見られる祈祷者像のものに似ていることや、ブルターニュ地方が15世紀中葉以降、百年戦争の戦禍により写本彩飾が下火となったパリに代わり彩飾が活発となる地域の一つであり、パリの影響を受けて固有の画家が活動した歴史があること(König 1982, 1991; Avril, Reynaud 1993, pp.175-179)、この挿絵を意図的に“Concede michi”に添えていることを配慮すると、何らかの形でベリー公の写本等の影響を受けた可能性がないとは言い切れない。また、第3節のとおり同写本が掲載する聖トマス・アキナスへの請願の挿絵は、グリエルモ作聖トマス伝の第34章の磔刑像の奇跡の場面である。同図の聖堂の屋内の描写がブルターニュ公のいる聖堂と似通っていることは、単に同一画家によるモデル図の機械的な再現に帰すべきではなく、意図的に両者を類似させたものと捉えるべきだろう。図像の類似と対関係は、ピエール2世も彩飾画家も“Concede michi”の由来を承知していたことを示唆する。

続いて検討するのは、聖体と聖杯を持物とする聖トマス・アキナス像である。聖体と聖杯を持った聖トマス・アキナス像が登場するのは、15世紀中葉になってからである(図3,10,15)。『サヴォワ公ルイ1世の時祷書』のみが聖人請願の挿絵である(図3)。中心に聖人の立像、左右に複数のコマに分割された聖人伝の諸場面から構成される画面は、13世紀イタリアの板絵聖人像の形式を想起させる<sup>32)</sup>。この写本の制作地ははっきりしないが、上述のように2人のフランドル様式の彩飾画家が彩飾した(Avril, Reynaud, 1993, no.114)。

残る聖体と聖杯を持つトマス像は、3点中2点がフランドルで制作された。『トリノ時祷書』は、上述のとおり彩飾頭文字Cに福者の画家により聖体と聖杯を持つトマスの立像が描かれている。福者の画家が彩飾に参加したのは、同写本の複数の彩飾段階の第6段階のことである(Van Buren, 1996, p.363)、およそ1450年頃のこととなる。ハーヴァード大学所蔵の『エマーソン=ホワイト時祷書』は、15世紀末から16世紀初頭のгент=ブリュージュ派を代表する2巻本のミサ典書・時祷書である(Kren, McKendrick, 2003, pp.169-173)。



残る1点は、すでに第3節において紹介したとおりフランスで制作されたローマ使用式時禱書に掲載されるトマス・アキナスへの請願の挿絵である。挿絵画家は、様式的には15世紀の中葉の特徴を見せているが、他の作例が確認されていないため、詳細な活動地、活動期間については不明である。画中のトマスの頭巾は、フランドルの写本挿絵で広くみられる。胸元に太い金鎖で下がる光輪は、バロック期以降によく見られるようになる<sup>33)</sup>。15世紀フランスで金鎖が描かれた経緯などは今後の調査の課題としたい。

ネーデルラントまたは同地出身の彩飾画家による作例で、トマス・アキナスの持物が聖体と聖杯であることは、それらがトマスのアトリビュートとして図像的に確立していく歴史とも関わりながら私的祈禱書類においては私的信仰の実践とも相俟って重要な意義を持つと考えられる。周知のように、聖体の祝日の典礼を作成したのはトマスである (Gy, 1980; Rubin, 2009)。聖体の祝日は、13世紀のリエージュの修道女モン＝コルニヨンの福者ジュリエヌの功績により (Haquin, 1999)、教皇ウルバヌス4世によって1264年に制定された。トマスが聖体の祝日の典礼式文を作成したのはこの教皇の命による。ドミニコ会の修道服、胸元の光輪、書物とともに、聖体はトマスのアトリビュートとして最初期から存在し得た。しかし、確認された現存作例を見る限り、聖体と聖杯が描かれる例は、15世紀のネーデルラントとフランスの東部に比較的集中して認められる代わり、イタリア、スペイン、パリには認められないという地域的な偏りがあるように思われる。聖体の祝日は、とりわけリエージュにおいて早くから祝われている。このことから、ネーデルラント全域で聖体の祝日が積極的に祝われたと結論づけるのは早計だが、トマス・アキナスの持物としてこれらが好まれた背景として、聖体の祝日の成立と深く関わった地域であるとの自意識、トマス・アキナスが聖体の祝日の典礼の作者として記念されていたこと等、聖人崇敬における地域性が大きく与っている可能性は小さくない。

この点であらためて注目されるのが『トリノ時禱書』の大型挿絵である (図10)。この挿絵がヤン・ファン＝エイク作『書斎の聖ヒエロニムス』から想を得ていることは既述のとおりだが、聖人伝ではナポリのサン・ニコラ礼拝堂に安置されていたという磔刑像が書斎に移されていることに注目したい。毎朝その前で“Concede michi”を詠じていたトマスに対して磔刑像が彼の著述活動を労うという奇跡の場面が、執筆中のトマスへの神の労いへと視覚的に融合されていると解される。挿絵では、磔刑像から労いの言葉を視覚化する巻物がトマスの耳元へ向かって翻る。さて、聖人伝において解釈が注目されるのは、磔刑像の労いの言葉に続く、報酬をめぐる問答である。磔刑像の問いに対してトマスは、「汝(神)以外の何もかも欲しない<sup>34)</sup>」と応じている。大型挿絵の左下の頭文字Cにあらためてトマスの立像が描かれているのは、磔刑像が称えたその執筆活動に聖体の教義も含まれることと、聖体の祝日の典礼の作成を喚起しているという解釈も成立し得る。大型挿絵、頭文字C、バ・ド・パーージュにおいて聖トマス・アキナスの生涯が奇跡とともに描かれていると仮定すると、頭文字C内の聖人立像は祈念像であるばかりではなく、聖体について論じ、典礼を書いたというトマスの生涯の業績の一つを強調していることになる。そのことを踏まえたうえで祈願文“Concede michi”と彩飾との関係を考察すると、神と聖体との

関係についてトマスが論じたことを念頭に置きながら祈祷者が祈願文を唱えてゆくことが意図されているといえるだろう。つまり、神への祈願にあたって、聖体の教義をも想起するよう促されていたとも考えられるのである。この点に関しては、聖体の祝日、聖体へ捧げられた祈願文および彩飾、トマス・アクィナスの著述等さらなる調査と考察が必要である。したがって、上述の聖体と聖杯を持つ聖トマス像を単なる聖人像以上に解釈することには慎重でなければならないが、全作例がフランドルまたはフランドルに関係することは、聖体の祝日への暗示を含んでいるのではないかと、との問いをここでは強調しておく。

同じネーデルラントにおいて、グリマーニ聖務日課書のダヴィデ伝の諸場面を描いた画家によってカスティリヤ女王フアナ1世のために制作された時祷書は、祈祷者個人の意向を反映した精緻な彩飾で知られる作例である (Morrison 2003)。しかし、本時祷書では、“Concede michi”を彩飾するのは余白の動植物文である。祈願文が掲載される3葉、6頁のうち、2頁目にあたるf.156vの下部余白に、巡礼バッジが縫い付けられていることが注目される。巡礼バッジは真鍮製を再現するのか黄褐色を呈し、聖母子の半身像が彫金で表されている。巡礼バッジの研究は、フランス<sup>35)</sup>、イギリス<sup>36)</sup>、ドイツ<sup>37)</sup>、特にベルギーにおいて近年隆盛をみているが<sup>38)</sup>、『フアナ1世の時祷書』f.156vに描かれている巡礼バッジに一致するバッジを確認するに至っていない<sup>39)</sup>。“Concede michi”を掲載する6頁の写実的な動植物モチーフに増して騙し絵的なイリュージョンの性格が強いこの巡礼バッジが、彩飾画家の技量を誇示する機会だったことは間違いない。巡礼バッジが描かれているのは写本中、ff.53<sup>40)</sup>、53v<sup>41)</sup>、54<sup>42)</sup>、57v<sup>43)</sup>、61v<sup>44)</sup>、184<sup>45)</sup>、184v<sup>46)</sup>、234v<sup>47)</sup>、248v<sup>48)</sup>、344<sup>49)</sup>、344v<sup>50)</sup>、395<sup>51)</sup>、395v<sup>52)</sup>、412<sup>53)</sup>の14か所である。これらの巡礼バッジが単なる装身具として描かれているとは考え難いが、祈願文“Concede michi”とバッジに表されている聖母子像の間の連関など、当写本における巡礼バッジ図像の解釈は今後の課題である。

15世紀後半以降のネーデルラントにおける、私的祈祷書類に実物の巡礼バッジを縫い付けたり (Bruna, 1998)、別紙に描かれた磔刑図や聖体を貼付したりしたうえで行う祈祷、接吻、手指による接触等についてルディらによる論考がある<sup>54)</sup>。先行研究として、巻末の1頁いっぱい複数のバッジをまとめて縫い付けている例や、ブルゴーニュ公フィリップ豪胆公の時祷書の聖母子像の挿絵の周辺に配置されていたバッジに関する事例研究がある (Bruna, 2006, pp.145-154)。前者は、私的祈祷書類が所有者に関わる記録保存の機能を有していたことが巡礼バッジの保存を説明するとし、路上では巡礼者であることを指示していたバッジが、ひとたび私的祈祷書類に保存されることで彩飾と類似した信仰の実践のために利用されるという機能の転換を示唆している。後者は、聖母子の半身像を描く大型挿絵の周囲に巡礼バッジを配置した作例を取り扱い、実物と欄外装飾、大型挿絵とテキストの欄外という相違はあるが、『フアナ1世の時祷書』とより類似した事例である。しかし、考察の焦点は、現在は取り外されている巡礼バッジを同定することにある。いずれの先行研究も、祈祷書と巡礼バッジとの関わりが個人の信仰生活を反映したものであることを指摘している。しかし、巡礼バッジと祈願文などのテキストの関係について注目したものはない。この点についても、今後の研究課題としたい。

## 6. 結語

聖トマス・アクィナス崇敬が私的祈祷書類の彩飾に反映されるのは 1370 年代末以降である。聖人請願の祈祷文に伴う聖人像の多くは、制作地や祈願文の相違に関わらず、板絵やフレスコとも共通する立像である。トマスの持物はフェラーラを例外として書物である。このことは、聖人請願が祈祷の形式として固定化していたことと関係すると考えられる。

他方、時祷書の巻末または独立した祈祷文集を構成する各種の祈願文は、美術史的な研究がほとんど行われていない領域である。トマス・アクィナス作の祈願文 “Concede michi” は、聖人請願と同様の聖トマスの図像を伴うばかりではなく、持物が書物に代わって聖体と聖杯のトマス像、祈祷者像、父なる神、キリストの洗礼、巡礼バッジなど多様化する。これは、祈願文を核として、その作者、祈祷者、そして祈祷が捧げられる神、という複数のベクトルが個人の祈祷という行為の中に存在することを祈祷者に認識させるものではないか、と考えられる。“Concede michi” の彩飾の機能としては、祈祷にあたり作者を想起し、彼の事績を模倣することが推奨されているのではないか、との仮説をここでは提示した。しかし、この仮説では《キリストの洗礼》や聖母子像の巡礼バッジという一見無関係な図像と祈願文をつなぐものが理解できない。祈願文におけるイメージの機能とその主題の決定の背景をよりよく知ることが今後重要である。

(本研究は、JSPS 科研費 25370139 の助成を受けたものです。)

### 注

- 1) ここで言う「私的」とは、通常「プライベートな」と同義である。しかし、この語の持つ近代的な意味での公的对義としての私としての語義を避けるために、Schmidt, 2005, pp.81-82 では、「パーソナルな」という形容辞の使用を提唱している。
- 2) “Intercession des saints”, Vauchez, André (dir.). *Dictionnaire encyclopédique du Moyen Age*. Vol.1, p.780; “Intercession”, Downey, Michael (ed.). *The New Dictionary of Catholic Spirituality*. Collegeville, Minnesota, 1993, pp.543-544.
- 3) 例として、『ベリー公のいとも美しき聖母時祷書』 *Très Belles Heures de Notre Dame du duc de Berry* は著名である。ベスフルグ・ケーニヒ 2002 の他、本稿 pp.58-59 参照。他に何らかの理由で分割された写本に『シモン・ド・ヴァリー時祷書』(Marrow & Avril 1994)、V&A, ms.MSL/1981/39; V&A, ms.MSL/1921/1723 (Watson 2011) 等がある。
- 4) 最近出版された論文集 Hindman, Marrow 2013 参照。
- 5) Calkins 1981; Farquhar 1987; Gifford 1987; Ainsworth 2003; Reynolds 2005 など。
- 6) Calkins 1976; Farquhar 1996.
- 7) Orth 1980.
- 8) As-Vijvers 2013. また写本学的アプローチとして Korteweg 2006 参照。
- 9) Kaufmann, Kaufmann, 1991; Orth 1996; Grebe 2001; Kren 2006; Marrow 2005.

- 10) Smith 1999; 先行研究は、Smith 2003, p.6, n.1 を参照。Sand 2005; Stocks 2013.
- 11) Ringbom 1969; Caviness 1993; Holladay 1994; Legaré1998; Schmitt 2000; Randall 2006; Barratt 2008.
- 12) この写本の先行研究は、大英図書館のウェブ・ページを参照。http://www.bl.uk/catalogues/illuminatedmanuscripts/record.asp?MSID=8486&CollID=28&NStart=1070 [2013年11月20日閲覧]
- 13) Dückers, Priem 2009. この時祈祷書に関する先行研究は、モーガン・ライブラリのウェブ・サイトを参照。http://corsair.morganlibrary.org/msdescr/BBM0917z.pdf および http://corsair.morganlibrary.org/msdescr/BBM0945a.pdf [2013年11月20日閲覧]
- 14) 作例を挙げると、ボッティチーニ《三連画右翼上方部分》(アヴィニョン、プティ・パレ美術館); アンドレア・ダ・ムラーノ《多翼祭壇画上方ルネッタ》(ヴェネツィア、アッカデーミア美術館); フラ・アンジェリコ《最後の審判》(フィレンツェ、サン・マルコ美術館)。また、『ブルターニュ公ピエール2世の時祈祷書』f.146vの挿絵に、星を散らした外套を着た聖ドミニクスが描かれている。
- 15) ジャン・ル・タヴェルニエについては、Avril, 1999; Bousmanne, Delcourt 2011 参照。
- 16) Durrieu 1910, 1911; Picard 1911; De Winter 1985.
- 17) この写本については、Manzari 2006ならびにオンライン・データベース Initiale の“Bibliographie” 参照。http://initiale.irht.cnrs.fr/ouvrages/ouvrages.php?id=-1&bloc\_recherche\_ouvrage=none&bloc\_resultats\_ouvrage=block&page=1&resetForm=0&imageInd=-1&codexId=-1&idMedium= [2013年11月21日閲覧]
- 18) この写本については、Kentucky Digital Library “MS LAT KY VIII” 参照。http://kdl.kyvl.org/catalog/xt7vmc8rct2t\_1 [2013年11月21日閲覧]
- 19) Seanger 1989, pp.98-106.
- 20) Leroquais 1927, pp. 268-270, no.134.
- 21) 先行研究は、Watson, 2011, l,p.401 を参照。
- 22) Seanger 1989, pp.155-157.
- 23) この図像の成立に典礼文を含む種々のテキストがどのように関与したのか、については詳しく検討する必要がある。
- 24) Espagnol, 2007; Ramón Marques, 2007, pp. 36, 98-108.
- 25) 『エマーソン・ホワイト時祈祷書』と同一のテキストを有する『ハス時祈祷書』(大英図書館、ms.Add.38126)については未調査である。Kren et McKendrick, 2003, pp.174-176, no.33.
- 26) Kren, McKendrick, 2003, pp.385-387, no.114; Marrow 2005, pp.27-33.
- 27) モーガン・ライブラリ、ウェブ・サイト参照：http://corsair.morganlibrary.org/msdescr/BBM0454a.pdf [2013年11月21日閲覧]
- 28) モーガン・ライブラリ、ウェブ・サイト参照：http://corsair.morganlibrary.org/msdescr/BBM0893a.pdf [2013年11月21日閲覧] また、Minardi 2004.
- 29) 《三連画：聖トマス・アキナス、聖母半身像、聖パウロ》、J. ポール・ゲティ美術館。また Schmidt 2005 参照。
- 30) 例として、シモーネ・マルティーニ《ピサ祭壇画・プレデッラ》(1319年)。
- 31) アンドレア・ダ・フィレンツェ《聖トマス・アキナスの勝利》サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院、スペイン礼拝堂西壁(1360-1366年); ベノッツォ・ゴッツォーリ《聖トマス・アキナスの勝利》ルーヴル美術館、(1471年)。

- 32) 例として、ルッカで活動したボナヴェントゥラ・ベルリンギエリ《聖フランチェスコ》、ペシア、サン・フランチェスコ聖堂、1235年頃。
- 33) 作例：スルバラン《聖トマス・アキナスの称揚》（セビリャ美術館）。S. リッチ《聖トマス・アキナスと聖ペトルスを伴う教皇ピウス5世》（ヴェネツィア、サンタ・マリア・デル・ロサリオ聖堂）。
- 34) “Domine, non nisi te.”
- 35) Forgeais 1862–66; Köster 1983; Bruna 2006、特に第7章参照（pp.145–154）。
- 36) Spencer 1998.
- 37) Kühne, Lambacher, Vanja 2008.
- 38) Van Beuningen, Koldewey 1993, 2011, 2013; Dengis 2008; Koldewey, J. 2008; Tixador 2004.
- 39) 近いものとして、パリ、国立中世（クリュニー）美術館、Cluny cl.4642、cl.4654、ニューヨーク、メトロポリタン美術館、inv.1977.240.76の3点が挙げられる。詳細な調査は今後の課題である。
- 40) 男性胸像（特定できず）。
- 41) 杖を持った聖母子像のペンダント。
- 42) ヴェロニカを持つ聖女ヴェロニカのペンダント。
- 43) 受胎告知？
- 44) 聖女カテリナ。
- 45) 福音書記者ルカを主題とする大型挿絵の余白に17個の巡礼バッジが描かれている。
- 46) 着帽の聖人胸像。
- 47) 帆立貝。
- 48) 帆立貝。
- 49) キリストの聖顔。
- 50) 黙示録の女としての聖母子。
- 51) ヴェロニカを持つ聖女ヴェロニカのペンダント。
- 52) ヴェロニカを持つ聖女ヴェロニカのペンダント。
- 53) 聖母子。
- 54) Koldewey, A.M. 1991; Rudy 2011.

#### 参考文献一覧

- Ainsworth, W.M. (2003). “Diverse patterns pertaining to the crafts of painters or illuminators”: Gerard David and the Bening workshop. In: *Master Drawing* vol.41, no.3, 240–265.
- Alexander, J.J.C., Marrow, J., Sandler, L.F. (2005). *The splendor of the word: medieval and Renaissance illuminated manuscripts at the New York Public Library*. New York: New York Public Library.
- Andrews, Christine Geisler (2002). The Boucicaut Masters. In: *Gesta* Vol.41, No.1, pp.29–38.
- As-Vijvers, A.M. (2013). *Re-Making the margin: the Master of the David Scenes and Flemish manuscript painting around 1500*. Turnhout: Brepols.
- Avril, François (1999). Jean Le Tavernier: un nouveau livre d’ heures. In *Revue de l’art* 126, 9–22. doi: 10.3406/rvart.1999.348471

- Avril, F. and Reynaud, N. (eds). (1993). *Les manuscrits à peintures en France. 1440–1520*. Paris: Bibliothèque nationale/ Flammarion.
- Bousmanne, B. (1997). *Item a Guillaume Wyelant aussi enlumineur: Willem Vrelant, un aspect de l'enluminure dans les Pays-Bas méridionaux sous le mécénat des ducs de Bourgogne Philippe le Bon et Charles le Téméraire*. Bruxelles: Bibliothèque royale de Belgique–Turnhout: Brepols.
- Bousmanne, B., Van Hoorebeeck, C. (2000). *La Librairie des ducs de Bourgogne*. Vol.I, *Textes liturgiques, ascétiques; théologiques, philosophiques et moraux*. Turnhout: Brepols.
- Bousmanne, B., Delcourt, Thierry (dirs.) (2011). *Miniatures flamandes. 1404–1482*. Bibliothèque royale de Belgique, 30 septembre–31 décembre 2011, Bibliothèque nationale de France, Paris, site François-Mitterrand, 6 mars–10 juin 2012. Bruxelles: Bibliothèque royale de Belgique–Paris: Bibliothèque nationale de France.
- Bruna, Denis (1998). Témoins de dévotions dans les livres d'heures de la fin du Moyen Age. *Revue Mabillon* (nouvelle série), t.9, 127–161.
- Bruna, D. (2006). *Enseignes de plomb et autres menues chosettes du Moyen Age*. Paris: Le Léopard d'Or.
- Calkins, Robert G. (1976). Distribution of labor: The illuminators of the Hours of Catherine of Cleves and their workshop. In: *Transactions of the American Philosophical Society* N.S. vol.69, no.5, 1–83.
- Calkins, R. G. (1981). An Italian in Paris: The Master of the Brussels Initials and his participation in the French industry. In: *Gesta* vol.20, no.1, 223–232.
- Carruthers, Mary. (1990). *The Book of memory: A study of memory in medieval culture*. New York: Cambridge University Press. (和訳: M. カラザース 『記憶術と書物: 中世ヨーロッパの情報文化』 別宮貞徳監訳、工作舎、1997年)
- Caviness, M.H. (1993). Patron or matron? A Capetian bride and a vademecum for her marriage bed. In: *Speculum* 68, no.2, 333–362.
- Châtelet, Albert (1993). *Jean Van Eyck enlumineur: les "Heures de Turin et de Milan–Turin"*. Strasbourg: Presses universitaires de Strasbourg.
- De Winter, Patrick M. (1985). *La bibliothèque de Philippe le Hardi, duc de Bourgogne (1364–1404)*. *Etudes sur les manuscrits à peintures d'une collection princière à l'époque du « style gothique international »*. Paris: Editions du CNRS.
- Dengis, Jean–Luc (2008). *Numismatique de la principauté abbatiale de Stavelot–Malmedy. Monnaies–jetons–médailles. Logne, atelier de faux–monnayage. Enseigne de pèlerinage. Monnaies de sites. Trésors*. (Collection Moneta 72). Wetteren: Moneta.
- Doyle, A.I. (1948). "A prayer attributed to St. Thomas Aquinas," *Dominican Studies* 1, 229–38.
- Dücker, Rob, Priem, Ruud (2009). *The Hours of Catherine of Cleves: Devotion, demons and daily life in the fifteenth century*. Nijmegen: Museum Het Valkhof [Biblio.].
- Durrieu, Paul (1903 janvier–février). Les débuts des Van Eyck. In: *Gazette des Beaux–Arts* t.30, 5–15, 107–120.
- Durrieu, P. (1910 juillet–décembre). Les « Très Belles Heures de Notre Dame » du duc Jean de Berry. Restitution de l'état primitif d'un splendide manuscrit du XVe siècle aujourd'hui dépecé, mutilé et au tiers brulé. Première partie. *Revue archéologique*. Quatrième série t.16,

- pp.30–51; Seconde partie. Restitution intégrale du manuscrit dans son état primitif. *Revue archéologique*. Quatrième série t.16, 246–79.
- Durrieu, P. (1911). Notice d'un des plus importants livres de prières de Charles V. Les Heures de Savoie ou "Très belles grandes heures" du roi. In: *Bibliothèque de l'école des chartes*. t.72, 500–555.
- Dutschke, C.W., Rouse, R.H. (eds.) (1989). *Guide to medieval and Renaissance manuscripts in the Huntington Library*, 2vols. Berkley: University of California Press.
- Espanol, Francesca (2007). El Salterio y Libro de Horas de Alfonso el Magnanimo y el cardenal Joan de Casanova: British Library, Ms. Add. 28962. In: Yarza Luaces (2007), 551–612.
- Farquhar, James Douglas (1987). Manuscript production and evidence for localizing and dating fifteenth-century book of hours: Walters W.239. In: *Journal of the Walters Art Gallery* vol.45, 44–88.
- Farquhar, J.D. (1996). Making connections in the irregular web of manuscript production of the Southern Netherlands. In: *Journal of the Walters Art Gallery* vol.54, 135–146.
- Forgeais, Arthur (1862–66). *Collecton de plombs historiés rouvés dans la Seine*. 5 vol., Paris.
- Gifford, E. Melanie (1987). Pattern and style in a Flemish book of hours: Walters W.239. In: *Journal of the Walters Art Gallery* vol.45, 89–102.
- Grebe, Anja (2001). The art of the edge: Frames and page-design in manuscripts of Ghent-Bruges school. In: *The metamorphosis of marginal images: From antiquity to present time*. Kennaan-Kedar, Nurith and Ovadia, Asher (eds.), Tel Avivi, 93-102.
- Gy, P.-M. (1980). L'office du Corpus Christi et saint Thomas d'Aquin. Etat d'une recherche. In: *Revue des Sciences philosophiques et théologiques* 64, 491–507.
- Hamburger, J.F. (2000). Seeing and believing: The suspicion of sight and the authentication of vision in late medieval art and devotion. In: Krüger, Klaus, Nova, Alessandro (eds.), *Imagination und Wirklichkeit: Zum Verhältnis von mentalen und realen Bildern in der Kunst der frühen Neizeit*. Mainz: Philipp von Zabern, 2000, 47–69.
- Hamburger, J.F. and Korteweg, Anne S. (eds.) (2006) *Tributes in honor of James H. Marrow: Studies in painting and manuscript illumination of the late Middle Ages and northern Renaissance*. London / Turnhout: Harvey Miller.
- Haquin, André (éd.) (1999). *Fête-Dieu (1246–1996)*. 1. Actes du colloque de Liège, 12–14 septembre 1996. Louvain-la-Neuve.
- Hindman, Sandra and Marrow, James (eds.) (2013). *Book of hours reconsidered* (Studies in Medieval and Early Renaissance Art History (HMSAH 72)). Turnhout: Brepols.
- Holladay, Joan A. (1994). The Education of Jeanne d'Evreux: Personal piety and dynastic salvation in her book of hours at the Cloisters. In: *Art History*. 17, 585–611.
- Kanter, Laurence B. et al. (eds.) (1994). *Painting and illumination in early Renaissance Florence, 1300–1450*, Catalogue of an exhibition held at the Metropolitan Museum of Art in New York Nov.17 1994–Feb.26 1995, New York: The Metropolitan Museum of Art.
- Koldewij, A.M. (1991). Pilgrim badges painted in manuscripts: A north Netherlandish example. In: *Masters and miniatures: Proceedings of the Congress on medieval manuscript illumination in the northern Netherlands (Utrecht 10–13 December 1989)*. Van der Horst, K., Klamt, J.C. (eds.),



- 211–218.
- Koldeweij, Jos (2008). Pilgrim and secular badges: Archaeological finds in the Low Countries. In: Kühne, Lambacher, Vanja (2008), 161–165.
- König, Eberhard (1982). *Französische Buchmalerei um 1450: Der Jouvenel-Maler, der Maler des Genfer Boccaccio und die Anfänge Jean Fouquets*. Berlin: Gebrüder Mann.
- König, E. (1991). *Les Heures de Marguerite d'Orléans: Reproduction intégrale du calendrier et des images du manuscrit latin 1156B de la Bibliothèque nationale (Paris)*. Paris: Cerf.
- Korteweg, Anne S. (2006). Framing the issues: A codicological approach to Dutch border decoration. In: Hamburger and Korteweg (eds.) 2006, pp.301-310.
- Köster, Kurt (1983). *Pilgerzeichen und Pilgermuscheln von mittelalterlichen Santiagostraßen: Saint-Léonard, Rocamadour, Saint-Gilles, Santiago de Compostela. Schleswiger Funde und Gesamtüberlieferung*. Neumünster: Karl Wachholtz Verlag.
- Kren, Thomas and McKendrick, Scott (eds) (2003). *Illuminating the Renaissance: The triumph of Flemish manuscript painting in Europe. Los Angeles: The J. Paul Getty Museum*.
- Kren, Thomas (2006). Simon Bening, Juan Luis Vives, and the observation of nature. In: Hamburger and Korteweg (eds.) 2006, pp.311-322.
- Kühne, Helmut, Lambacher, Lothar, Vanja, Konrad (eds.) (2008). *Das Zeichen am Hut im Mittelalter: Europäische Reisemarkierungen. Sympson in memoriam Kurt Köster (1912–1986) und Katalog der Pilgerzeichen im Kunstgewebemuseum der Staatlichen Museen zu Berlin*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Kuroiwa, Mie (2012). L'iconographie de saint Thomas d'Aquin dans les manuscrits enluminés (1): manuscript des oeuvres de Thomas d'Aquin (c.1250–c.1510). *Journal of the College of Intercultural Communication* Vol.4, 1–33.
- Kuroiwa, Mie (2013). L'iconographie de saint Thomas d'Aquin dans les manuscrits enluminés parisiens (2) : l'office de saint Thomas d'Aquin dans les livres liturgiques (c.1330 – c.1510). *Journal of the College of Intercultural Communication* Vol.5, 15–40.
- Ladner, Pascal (ed), Leisibach, Josef (1976). *Iter Helveticum, Teil I. Die liturgischen Handschriften der Kantons- und Universitätsbibliothek Freiburg*. Freiburg: Universitätsverlag.
- Le Brun-Gouvanvic, Claire (1996). *Ystoria sancti Thome de Aquino de Guillaume de Tocco (1323)*. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- Le Brun-Gouvanvic, Claire (2005). *L'histoire de saint Thomas d'Aquin de Guillaume de Tocco. Traduction française du dernier état du texte (1323) avec introduction et notes*. Paris: Cerf.
- Lechner, Gregor Martin (1974). Iconographia Tomasiana. Thomas von Aquin. Seine Darstellungen in der bildenden Kunst, in *Thomas von Aquino. Interpretation und Rezeption*, ed. By W.P. Eckert, Mainz, 933–973.
- Leroquais, Victor (1927). *Les livres d'Heures manuscrits de la Bibliothèque nationale de France*. 2 vol., Paris, 1927.
- Leroquais, V. (1943). *Supplément aux livres d'Heures manuscrits de la Bibliothèque nationale*. Mâcon: Protat Frères.
- Manzari, Francesca (2006). *La miniatura ad Avignone al tempo dei papi: 1310–1410*. Modena: F. C. Panini.

- Marrow, James H. (1996). Introduction. *Heures de Turin-Milan. Inv.No.47, Museo Civico d'Arte Antica, Torino. Commentaire.* eds. A.H. van Buren, J.H. Marrow, S. Pettenati, Luzern: Faksimile Verlag, 223-231.
- Marrow, J.H. (2005). *Pictorial invention in Netherlandish manuscript illumination of the late Middle Ages: The play of illusion and meaning.* Leuven: Peeters.
- Marrow, J.H. & Avril, F. (1994). *The hours of Simon de Varie.* London / New York: Thames and Hudson.
- Meiss, Millard (1968). *French painting in the time of Jean de Berry: The Boucicaut Master.* London: Phaidon.
- Minardi, Mauro (2004). Tommaso di Cesare da Basso da Modena. In: *Dizionario biografico dei Miniatori italiani*, Milano: Sylvestre Bonnard, 953-955.
- La miniatura a Ferrara. Dal tempo di Cosmè Tura all'eredità di Ercole de' Roberti, Ferrara.* Ferrara, Palazzo Schifanoia, 1 Marzo-31 Maggio 1998. [Morgan Library, ms.M.893: no.54, pp.254-257; Thommaso da Modena: cf.pp.292-293.]
- Morrison, Elizabeth (2003). Hours of Joanna of Castile. In: Kren and McKendrick (2003), 385-386, cat.no.114.
- Oliver, Judith (1990). An early Parisian book of hours remodeled in Italy. In: *Journal of the Museum of Fine Arts, Boston* 2, 4-17.
- Oliver, J. (1999). Le rôle de l'art dans l'institution de la Fete-Dieu, in: *Fete-Dieu* ed. A. Haquin, 155-172 et 16 illustrations.
- Orth, Myra Dickman (1980). Two books of hours for Jean Lallement Le Jeune. In: *Journal of the Walters Art Gallery.* Vol.38, 70-93.
- Orth, M. (1996). What goes around: Borders and frames in French manuscripts. In: *Journal of the Walters Art Gallery.* Vol.54, 276-278.
- Picard, Etienne (1911). *La dévotion de Philippe le Hardi et de Marguerite de Flandre d'après des documents inédits.* Dijon: Imprimerie Jobard.
- Prümmer, D., O.P. (1931). *Vita S. Thomae Aquinatis.* Ligugé: Aubin / Saint-Maximin (Var): Bureaux de la "Revue thomiste".
- Purtle, Carol J. (1990-91). The iconography of prayer, Jean de Berry, and the origin of the Annunciation in a church. In: *Simiolus* Vol.20, No.4, 227-239.
- Ramón Marques, Nuria (2007). *La iluminación de manuscritos en la Valencia gótica (1290-1458).* Valencia: Conselleria de Cultura, Educació i Esport, 36, 98-108.
- Reinburg, Virginia (2012). *French book of hours: Making an archive of prayer, c.1400-1600,* Cambridge: Cambridge University Press.
- Reynolds, Catherine (2005). The 'Très Riches Heures', and the Bedford workshop and Barthélemy d'Eyck. In: *Burlington Magazine* vol.147, no.1229, 526-533.
- Ringbom, Sixten (1969). Devotional image and imaginative devotions: notes on the place of art in medieval piety. *Gazette des Beaux-Arts* 6<sup>e</sup> série, 73, 159-170.
- Rubin, Miri (2009). *Corpus Christi: The Eucharist in medieval culture.* Cambridge University Press.
- Rudy, Kathryn M. (2007). A pilgrim's memory of Jerusalem: London, Wallace Collection MS M.319. In: *Journal of the Warburg and Courtauld Institute* Vol.70, 311-325.

- Rudy, K. M. (2011). Kissing images, unfurling rolls, measuring wounds, sewing badges and carrying talismans: considering some Harley manuscripts through the physical rituals they reveal. In: *Electronique British Library Journal* (<http://www.bl.uk/eblj/2011articles/pdf/ebljarticle52011.pdf>)
- Saenger, Paul (ed.) (1986). *Catalogue of medieval and Renaissance manuscripts of Newberry Library*. Chicago: University of Chicago Press.
- Sand, Alexa K (1999). Picturing devotion anew in the Psalter–Hours ‘of Yolande of Soissons’ (New York, Pierpont Morgan Library M729). (Ph.D. dissertation, University of California–Berkley).
- Sand, Alexa (2005). Vision, devotion and difficulty in the Psalter–Hours “of Yolande de Soissons” . In: *Art Bulletin* Vol.87, No.1, 6–23.
- Schmidt, Victor M. (2005). *Painted piety: panel paintings for personal devotion in Tuscany, 1250–1400*. Firenze: Centro Di.
- Schmitt, J.–C. (2000). L’Imagination efficace. In: Krüger, Klaus, Nova, Alessandro (eds.), *Imagination und Wirklichkeit: Zum Verhältnis von mentalen und realen Bildern in der Kunst der frühen Neuzeit*. Mainz: Philipp von Zabern, 2000, 13–20.
- Scott–Stokes, Charity (2006). *Women’s books of hours in medieval England: Selected texts translated from Latin, Anglo–Norman French and Middle English with introduction and interpretive essay*. Woodbridge: D.S. Brewer.
- Smith, Kathryn A. (1999). The Neville of Hornby Hours and the design of literate devotion. In: *The Art Bulletin* 81–1 (Mar., 1999), 72–92.
- Smith, Kathryn A. (2003). *Art, identity and devotion in fourteenth–century England: three women and their books of hours*. London: The British Library, Toronto:University of Toronto Press.
- Spencer, B. (1998). *Pilgrim souvenirs and secular badges. Medieval finds from excavations in London*. London.
- Spreitzer, Jennifer (1994). Framing Mary of Burgundy. In: *Chicago Art Journal* 4, 2–13.
- Stirneemann, P., Rabel, C. (2005). The ‘Très Belles Heures’ and two artists associated with the Bedford workshop. In: *Burlington Magazine* Vol.147, No.1229, 534–538.
- Stocks, Bronwyn (2013). Devotional emphasis and distinctive variations in the illustration of the Hours of the Virgin in Italian books of hours. In: Hindman, Marrows 2013, pp.365–387.
- Tixador, Arnaud (2004). *Enseignes sacrées et profanes médiévales découvertes à Valenciennes. Un peu plus d’un kilogramme d’histoire*. Valenciennes: Service archéologique de Valenciennes.
- Van Buren, A.H. (1994–1996). *Heures de Turin–Milan: Inv. N°47, Museo civico d’arte antica, Turin*. Luzern: Faksimile Verlag.
- Van Beuningen, H.J.E., Koldewij, A.M. (1993). *Heilig en profaan, 1000 laatmiddeleeuwse insigne suit de collectie H.J.E. van Beuningen*. Cothen, Stichting Middeleeuwse Religeuze en Profane Insignes (Rotterdam Papers VIII).
- Van Beuningen, H.J.E., Koldewij, A.M., Kicken, D. (2001). *Heilig en profaan 2. 1200 laatmiddeleeuwse insignes uit openbare en particuliere collecties*. (Rotterdam Papers XII). Rotterdam:Cothen.
- Van Beuningen, H.J.E., Koldewij, A.M., Kicken, D., van Asperen, H. (2012). *Heilig en Profaan*

- 3.1300 *laatmiddeleeuwse insignes uit openbare en particuliere collecties*. (Rotterdam Papers XII). Rotterdam: Cothen.
- Watson, Rowan (2011). *Victoria and Albert Museum. Western illuminated manuscripts: A catalogue of works in the National Library from the eleventh to the twentieth century, with a complete account of the George Reid Collection*. 3 vols. London: Victoria and Albert Museum.
- Wieck, Roger S. (1988). *Time sanctified: The book of hours in medieval art and life*. New York: Braziller / Baltimore: Walters Art Gallery.
- Wieck, R.S. (1997). *Painted prayers: The book of hours in medieval and Renaissance Art*. New York: Braziller, Pierpont Morgan Library.
- Wilmart, André (1971). « XIX. La tradition littéraire et textuelle de l'*Adoro te devote* » in: *Auteurs spirituels et textes dévots du moyen âge latin. Etudes d'histoire littéraire*, Paris: Etudes augustiniennes, (réimpression de l'édition parue en 1932), 361–414. (« Concede michi... » cf.p.380,n. 387,n.6, 584)
- Yarza Luaces, Joaquín (ed.) (2007). *La miniatura medieval en la Península Ibérica*. Murcia: Nausicaä.

## 【附録 I-a】 聖トマス・アクィナスへの請願祈祷文を含む写本一覧

(所蔵機関所在地・五十音順)

1. ニューヨーク、モーガン・ライブラリ、『カタリーナ・ファン・クレーフェの時祷書』、ms.M.917/945、ユトレヒト、1440年頃。P.287:《書物に目を落とす聖トマス・アクィナス》(カタリーナ・ファン・クレーフェの画家)
2. ハーグ、オランダ王立図書館、『フィリップ善良公の時祷書』ms.76 F 2, オーデナルド、1454年。F.269v:《室内で開いた書物を持つ聖トマス・アクィナス立像》(ジャン・ル＝タヴェルニエ)
3. パリ、フランス国立図書館、『ゲーイの時祷書』ms.lat.921、パリ、1450年頃。F.237v:《聖トマス・アクィナス立像》(ベッドフォード・トレンド)
4. 同上、『ブルターニュ公ピエール2世の時祷書』ms.lat.1159、フランス西部(ナント)、1455年-1457年。F.149v:《語りかける磔刑像の前で跪く聖トマス・アクィナス》(ナントのベッドフォード様式の画家)
5. 同上、『サヴォワ公ルイ1世の時祷書』ms.lat.9473、サヴォワ地方、15世紀後半。F.174v: 半頁大挿絵: 中央《額に星が輝く聖トマス・アクィナス立像》周辺《聖トマス伝より6場面》(ペロネ・ラミーまたはルイ・ド・サヴォワの時祷書第2の画家)
6. 同上、『アラゴン王フレデリコ3世の時祷書』ms.lat.10532、トゥール、1501年-1504年。P.365:《書物を持つ聖トマス・アクィナス立像》(ジャン・ブルディション)
7. 同上、『ローマ使用式時祷書』ms.lat.13266、フランス。F.149v:《聖トマス・アクィナス》(画家不明)
8. ブリュッセル、ベルギー王立図書館、ms.9484 (anc.716)、『パリ使用式時祷書』、パリ、1410年-1420年頃。Ff.49-56:「聖人請願」〈シャンピ・イニシャル〉
9. 同上、『ルネ王の時祷書』ms.Egerton 1070、パリ、1410年頃。F.88v:《書物を持つ聖トマス・アクィナス半身像》(エジャートン 1070の画家)

## 【附録I-b】 聖トマス・アクィナスへの請願祈祷文一覧

(制作年代順)

『ルネ王の時祷書（パリ使用式）』大英図書館、ms.Egerton 1070、パリ、1410-1420（図1）。

交唱“Similabo eum viro sapienti qui edificavit domum suam super petram.”；先唱“Justum deduxit Dominus per vias rectas”；答唱“Et ostendit illi regnum Dei.”；祈願“adesto domine partibus nostris quas in sancti Thome dAquini confessoris tui solempnitate deferimus ut qui nostre justitie fiduciam non habemus ejus qui tibi placuit meritis precibus adivuem.”

『ゲーイの時祷書（パリ使用式）』フランス国立図書館、ms.lat.921、パリ、1450年代。

交唱“O Thoma laus et gloria predicatorum ordinis, nos transfer ad celestia professor sacre numinis”；先唱“Ora pro nobis beate Thomas.”；答唱“Ut digni efficiannur promissionibus christi, Oremus.”；祈願“Deus qui ecclesiam tuam beati Thome confessoris tui mira eruditione clarificas, et sancta operatione fecundas. Da nobis quesumus, ut que docuit intellecta conspiracem et que egis mutatione complere. Par Christum Dominum nostrum. Amen.”

『フィリップ善良公の時祷書（パリ使用式）』アントワープ（テキスト）、ハーグ、王立図書館、ms.76.F.2、1454年頃（図4）。

O Thoma laus et gloria predicatorum ordinis；先唱“Declaratio sermonum tuorum illuminat”；答唱“Et intellictum dat paruiis”；祈願“Deus qui ecclesiam tuam miri beati Thome …”

『カトリーナ・ファン・クレーフェの時祷書（ユトレヒト使用式）』モーガン・ライブラリ、ms.M.917/945、ユトレヒト、1440年代（図2）。

Collaudetur Christus rex glorie …”；先唱“Non est inventus illi; qui conservaret legem exelsi.”；集会祈願“Deus qui ecclesiam tuam mira beati Thome confessor …”

『ブルターニュ公ピエール2世の時祷書（ナント使用式）』フランス国立図書館、ms.lat.1159、1455-1457年頃。

交唱“Scandit doctor tuus celestium orbis doctor suv? dux fidelium norma limes sev morum bas omnium virtutum ad in te bravium.”；先唱“Ora pro nobis beate Thoma.”；答唱“Ut signum efficiamur promissionibus Christi.”；祈願“Deus qui ecclesiam tuam mira beati Thome confessoris tui eruditione clarificas et sancta operatione fecunda da nobis quesumus et que docuit intellecta conspiceret et que extit in nutatione complere Per Christum Dominum nostrum. Amen.”

『時禱書（ローマ使用式）』同上、ms.lat.13266、15世紀。

交唱 “Felix Thomas doctor ecclesie lumen mundi splendor Ytaile cadens virgo flore mundicie bina gaudet corona glorie.”；先唱 “Ora pro nobis beate Thoma.”；答唱 “Ut dignum.”；祈願 “Meus (sic.) qui ecclesiam tuam mirabilem Thome confessoris tui erudicione clarificas et sancta operatione fecundas. Da nobis ut que docuit intellectu cospicere et que egit imitatione complere. Per Christum.”

『ルイ・ド・サヴォワの時禱書（ローマ使用式）』同上、ms.lat.9473、15世紀中葉または後半（図3）。

交唱 “Hic vir dispiciens mundum, terrana triumphans divitas cello condidit ore et manu.”；先唱 “Justum deduxit Dominus per vias rectas”；答唱 “Et ostendit illi regnum Dei.”；先唱 “Domine exaudi orationem meam.”；答唱 “Et clamor meus ad te veniat.”

『アラゴン王フレデリック3世の時禱書（ドミニコ会使用式）』同上、ms.lat.10532、1500–1505年頃（図5）。

聖トマス・アクィナス祭の交唱 “Thomas laus et gloria praedicatorum ordinis: nos transfer ad celestia..”；先唱 “Rigans montem de superioribus suis.”；答唱 “De fructu operum tuorum satiabitur terra.”；祈願 “Da nobis quesumus Domini beati Thome confessoris tui …”



## 【附録 II-a】 伝聖トマス・アクィナス作祈願文 “Concede michi” を含む 写本一覧

(所蔵機関所在地五十音順)

### 祈祷文に図像彩飾を伴う写本

1. アヴィニョン市立図書館、『アヴィニョン教皇クレメンス7世の祈祷書』、ms.6733、アヴィニョン、1378-1383年頃。F.6：彩飾頭文字C《祈る聖トマス・アクィナス》(ジャン・ド・トゥルーズ) (図7)  
赤色標題：“Sequuntur orationem fecit beatus Thomas de Aquino ad Deum.”
2. ニューヨーク、モーガン・ライブラリ、『チェチリア・ゴンツァーガの時祈祷書』、ms.M.454、イタリア北部(ミラノか)、1470年頃。F.129：彩飾頭文字C《星をちりばめた青色背地に側面観の聖トマス・アクィナス胸像》(ミラノ様式の第2の画家) (図18)  
赤色標題：“Oratio beati Thome de Aquino Ordinis predicatorum.”
3. 同上、『ウォリック公ヘンリ・オヴ・ポーシャンの詩篇・時祈祷書』、ms.M.893、後補部分フェッラーラ、1482年頃。F.236：《聖堂の雛形と書物を持つ聖トマス・アクィナス立像》(トーマソ・ダ・モーデナ) (図19)  
赤色標題：“Oratio beati Thome de Aquino ordinis predicat [orum].”
4. ハーグ、オランダ王立図書館、『フィリップ善良公の時祈祷書』、ms.76 F 2、オーデナルド、1454年頃。F.17：彩飾頭文字C《キリストの洗礼》(ジャン・ル＝タヴェルニエ) (図14)  
赤色標題：“Cy commence une tres devote oraison que saint Thomas dAquin disoit.”  
[cf. “Blader door Getijdenboek Philips van Bourgondië”  
<http://www.kb.nl/bladerboek/bourgondie/browse/book.html>]
5. パリ、フランス国立図書館、『ブルターニュ公ピエール2世の時祈祷書』、ms.lat.1159、ナント、15世紀。F.27：《祈祷台に跪き、神を見上げて祈るピエール2世》(ナントのベッドフォード様式の画家) (図12)  
赤色標題：[なし]
6. 同上、『ベリー公の小さき時祈祷書』、ms.lat.18014、1390年代。F.117v：《聖トマス・アクィナスに促され、神に祈祷するベリー公ジャン》(偽ジャクマール) (図6)  
赤色標題 (f.117)：“Oratio doctoris egregii sancti Thome de Aquino.”
7. プラハ、国立図書館『ローマ使用式時祈祷書』、ms. XXII.G.89、フランス、1470年頃。F.120：彩飾頭文字C《父なる神》(ジャン・ロラン2世の画家様式) (図13)  
赤色標題：“Oratio devotissima ad Patrem.”  
[[http://www.manuscriptorium.com/apps/main/index.php?request=request\\_document&docId=set20100108\\_182\\_48](http://www.manuscriptorium.com/apps/main/index.php?request=request_document&docId=set20100108_182_48)]

8. マサチューセッツ州ケンブリッジ、ハーヴァード大学附属ホートン図書館、『エマーソン＝ホワイト時禱書』、ms.Typ 443、ゲント＝ブリュージュ、1480年代後半。F.105v：彩飾頭文字C《膝に書物を広げ聖体をのせた皿と聖杯を右手に持つ聖トマス・アキナス座像》(ゲント・アソシエーツ画家群) (図15)  
赤色標題：“Oratio beati Thome de Aquino.”
9. ロンドン、大英図書館、『アラゴン王アルフォンソ5世の時禱書』、ms.Add 28962、アラゴン王国(バレンシア?)、1436-1443年頃。F.36：《跪いて祈る聖トマス・アキナスに応答する磔刑像のキリスト》(レオナルド・クレスピ) (図11)  
赤色標題：“Oratio sancti Thome de Aquino ordinis fratrum predicatorum.”
10. 旧トリノ国立図書館、『トリノ時禱書』、ms. 1440年代か。F.73：大型挿絵《書斎の聖トマス・アキナス》、彩飾頭文字C《聖体を載せた聖杯を持つ聖トマス・アキナス立像》、バード・パージュ《聖トマス・アキナスの死》(ジャン・シュヴローの画家・福者の画家) (図10)  
赤色標題：[不明]

### 祈祷文に図像彩飾のない写本

11. ケンタッキー州立大学図書館 特別コレクション中世写本部門、『ローマ使用式フィリッポ・マリア・ヴィスコンティの祈祷書』、ms.KY Lat.VIII、イタリア北部(ミラノか)、1412年、ff.74v sq.  
赤色標題：“Oratio.”  
(ボルティモア W323 写本の画家) (図9)
12. サン＝マリノ、ハンティントン図書館、『ローマ使用式時禱書』、ms.H.1104、フランス、15世紀。Ff.203-236の一部。  
赤色標題：“Sancti Thome de Aquino oratio.”  
[Dutschke and Rouse, 1989, vol.2, pp.417-421]
13. 同上、『ラングル使用式時禱書』、ms.1169、ツール、15世紀末。  
赤色標題：“Oratio sancti Thome de Aquino.”  
[Dutschke and Rouse, 1989, vol.2, pp.514-516]  
(ジャン・ポワイエ様式)
14. シカゴ大学附属ニューベリー図書館、『マルグリット・ド・クルーイの時禱書』、ms.56、ネーデルラント地方、1430年-1450年頃、ff.114v-115v  
赤色標題：“Oratio sancti Thome de Aquino que sequitur devote dicenda.”  
[Saenger 1986, pp.98-106, esp.99]
15. 同上、『ローマ(フランチェスコ会)使用式時禱書』、ms.82、グッピオ、15世紀前半、ff.171v-173

赤色標題：“Oratio ad crucifixum dovotissa et utilis.”

[Saenger 1986, pp.150-55, esp.p.152]

16. 同上、『アンヌ・ド・ブルターニュの時禱書』、ms.83、フィレンツェ、1499年以後、ff.31-33v

赤色標題：“Oratio sancti Thome de Aquino qua singulis diebus genibus flexis crucifixum orabat.”

[Saenger 1986, pp.153-57, esp.155]

17. パリ、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、『女性信徒のためのラテン語・フランス語祈禱文集』、ms.2737/2、パリ、14世紀、ff.149 sq.

赤色標題：“C'est l'oroison saint Thomas d'Aquin”.

18. 同上、『祈禱文・教化論集』、ms.2752/36、フランス、14世紀、ff.85v sq.

赤色標題：“Oratio S.Thome de Aquino.”

19. パリ、フランス国立図書館、『オルレアン公シャルルの祈禱文集』、ms.lat.1196、イギリス（ロンドンか）、1415-1445、ff.84v sq.

赤色標題：“Alia oratio.”

(ヘルマン・シェーレ様式)

20. 同上、『祈禱文集』、ms.lat.1419、制作地不明、15世紀、ff.20v sq.

赤色標題：[なし]

21. 同上、『リモージュ使用式時禱書』、ms.lat.1425、フランス南西部か、1449年、ff.174v-176

赤色標題：“Sanctus Thomas de Aquino dicebat ante crucifixum. Oratio.”

22. 同上、ハインリヒ・ゾイゼ『黙想・祈禱文集』、ms.lat.3606、制作地不明、ff.131v-132

赤色標題：[不明]

23. フランクフルト大学図書館、『ドミニコ会使用式祈禱書』、ms.Praed.183、フランクフルト、1511年、ff.124sq.

赤色標題：“Oratio bona sancti Thome”

[Köttelwesch 1968, p.409]

24. フリブール州立大学図書館、『祈禱書』、ms.L 322、スイス西部、ff.2v-3v

赤色標題：“Tercia oratio eiusdem quasi perfectorum”

25. ブリュッセル、ベルギー王立図書館、『フィリップ豪胆公の祈禱書』、ms.KBR 10392、1370年代、ff.212-213

赤色標題：“Oratio quam fecit s (an) c (tu) s thomas de aq (u) ino ad deu (m).”

26. ボルティモア、ウォルターズ・アート・ミュージアム、『時禱書』、ms.W.215、フランドルまたはアルトワ（リールか）、1400年-1415年頃、ff.17-18

赤色標題：[不明]

27. ロンドン、大英図書館、『ローマ使用式カスティリャ女王ファナ1世の時禱書』、

ms.Add.18852、ゲント＝ブリュージュ、1496-1506年頃。F.156: 金彩飾頭文字C。Ff.156-158v: 欄外余白装飾《切り花、鳥類、荘厳のキリスト像を含む巡礼バッジ》(グリマーニ聖務日課書ダビデ伝の画家工房) (図16、17)

赤色標題：“Devota oratio ad Christum que composivit beatus Thomas de Aquino, et sequitur.”

28. ロンドン、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、『サルティング(マルミヨン)時祷書』、ms. MSL/1910/2384 (Salting 1221)、ブリュージュ・ヴァランシエンヌ、1470年-1475年頃、ff.246-249

赤色標題：“Oratio de Sancto Thoma.”

(シモン・マルミヨン、ウィラム・フレラン様式、フィッツウィリアム268番の画家、ドレスデン祈祷書の画家)

## 【附録 II-b】 伝トマス・アキナス作祈祷文 “Concede michi”

### ラテン語原文

Concede michi misericors Deus que tibi placita sunt ardentem concupiscere, prudenter inuestigare, ueraciter agnoscere et perfecte implere. Ad laudem et gloriam nominis tui ordina statum meum, et quod a me requiris tribue ut sciam, et da exequi ut oportet et expedit anime mee. Via mea, Domine, ad te tuta sit, recta et consummata, non deficiens inter prospera et aduersa, ut in prosperis tibi gratiam referam et in aduersis seruem patientiam, ut in illis non extollar et in istis non deprimar; de nullo gaudeam nisi quod promoueat me apud te, nec de aliquo doleam nisi quod abducat me a te; nulli placere appetam uel displicere timeam nisi te. Vilescant michi omnia transitoria propter te, et cara sint michi omnia tua et tu Deus super quam omnia. Tedeat me omnis gaudii quod est sine te, nec cupiam aliquid quod est extra te. Delecte me labor qui est pro te, et tediosa sit michi omnis quies que non est in te. Frequenter da me cor meum ad te dirigere, et defectionem meam cum emendationis proposito dolendo pensare. Fac me, Deus meus, humilem sine fictione, ylaem sine dissolutione, tristem sine deiectione, maturum sine grauitate, agilem sine leuitate, ueracem sine duplicitate, te timentem sine desperatione, sperentem sine presumptione, proximum corrigere sine simulatione, ipsum edificare uerbo et exemplo sine elatione, obedientem sine contradictione, patientem sine murmuratione. Da michi, dulcissime Deus, cor peruigil quod nulla abducat a te curiosa cogitatio; da nobile quod nulla deorsum trahat indigna affectio; da inuictum quod nulla fatiget tribulatio; et da rectum quod nulla obliquet sinistra intentio. Largire michi, Domine Deus meus, intellectum te cognoscentem, diligentiam te querentem, sapientiam te inuenientem, conuersationem tibi placentem, perseuerantiam te fideliter expectantem, et fiduciam te finaliter amplectentem; tuis penis configi per penitentiam, tuis beneficiis uti in uia per gratiam, et tuis gaudiis in patria frui per gloriam. Amen.



図1. エジャートンの画家《書物を持つ聖トマス・アキナス》、大英図書館、ms.Egerton 1070, f.88v.



図2. カテリナ・ファン・クレーフェの画家《書物を持つ聖トマス・アキナス》、モーガン・ライブラリ、ms.M.917/945, p.287.



図3. フランドル様式の画家《聖体・聖杯と書物を持つ聖トマス・アキナス；聖トマス伝より6場面》フランス図書館、ms.lat.9473, f.174v.



図4. ジャン・ル・タヴェルニエ《書物を持つ聖トマス・アキナス》、オランダ王立図書館、ms.76.F.2, f.269v.



図5. ジャン・ブルディション《書物を持つ聖トマス・アキナス》、フランス国立図書館、ms.lat.10532, p.364.



図6. 偽ジャクマールの画家《聖トマス・アキナスを伴うベリー公ジャン》、フランス国立図書館、ms.lat.18014, f.117v.



図7. ジャン・ド・トゥルーズ《祈祷書を前に祈る聖トマス・アキナス》、アヴィニヨン市立図書館、ms.6733, f.6v.



図8. ジャン・ド・トゥルーズ《執筆する聖トマス・アキナス》、アヴィニヨン市立図書館、ms.6733, f.6.

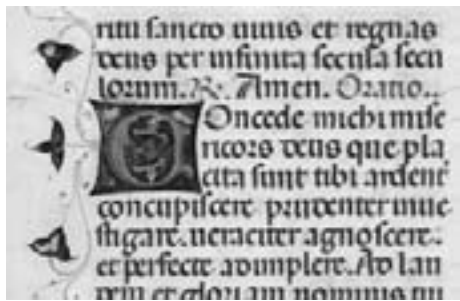


図9. 《金彩裝飾頭文字C》、ケンタッキー州立大学、特別コレクション中世写本部門、ms. KY Lat.VIII, f.73v.



図10. ジャン・シュヴローの画家・福者の画家《書斎の聖トマス・アキナス；聖体と聖杯を持つトマス；トマスの最期》、旧トリノ国立・大学図書館（焼失）、f.73.





図 11. レオナルド・クレスピ《磔刑像に向かって祈祷中に浮揚する聖トマス・アクィナス》、大英図書館、ms.Add.28962, f.36.



図 12. 《礼拝堂で祈るブルターニュ公ピエール2世》、フランス国立図書館、ms.lat.1159, f.26.



図 13. ジャン・ロラン2世の画家（様式）《父なる神》プラハ、国立図書館



図 14. ジャン・ル・タヴェルニエ《キリストの洗礼》、ハーグ王立図書館、ms.76, f.17.



図 15. ゲント・アソシエーツ（様式）《聖体と聖杯を持つ聖トマス・アクィナス》、ハーヴァード大学附属ホートン図書館、ms.Typ.443, f.105v.

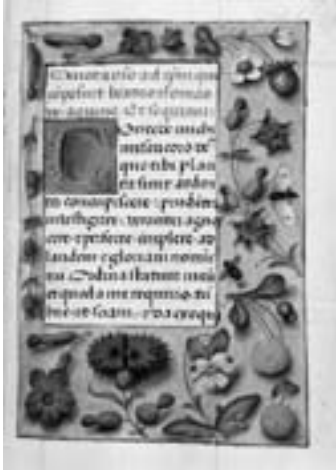


図 16. 《草花・昆虫モチーフ余白装飾》、大英図書館、ms.Add. 18851, f.156.



図 17. 《巡礼バッジ・鳥類モチーフ余白装飾》、大英図書館、ms.Add.18851, f.156v.



図 18. 《書物を持つ聖トマス・アキナス》、モーガン・ライブラリ、ms.M.454, f.129.



図 19. トンマーズ・ダ・モーデナ《書物と聖堂の雛型を持つ聖トマス・アキナス》、モーガン・ライブラリ、ms. M.893, f.236.